
妖怪屋敷

これって・・・日常だね！ このフレーズ大好き

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

妖怪屋敷

【Nコード】

N1169Z

【作者名】

これって・・・日常だね！ このフレーズ大好き

【あらすじ】

一言で言うと、僕のオナニ小説。
色んな作品に感化されているし、色んな作品のパロキャラが登場します。

でも、僕と感性が似ている方はそれなりに楽しめる・・・かも？
人がたくさん死にます。妖怪もたくさん死にます。
そんなサバイバル内容を、作者は非常に楽しんで書いております。
ぜひ、一目見てからお帰り下さい。

ってか見てって？ お願い・・・（超潤んだ目

零 【招待】（前書き）

この回は何ともないです。

読者によれば、「は？w」「ってなる回かもしねません。

詳しくは後書きに記します。

それでは、バイバーイ

零 【招待】

12月3日 霧島家の様子

真冬の寒さとあつてか、家からでる者は少ない。

行き交う人々全員が地味目の色コートで身を包み、思い思いの場所まで歩いて行く。

犬を連れた主婦が電柱まで走り寄る。

どうやら、イヌが用を足している様子だ。

その電柱には『ペットの糞を持ち帰れ 立ちション禁止』と殴り書き。

気付いた主婦は、一瞬顔をしかめるも スグに犬を連れて電柱を立ち去った。

ポツリと残された電柱。

ヒンヤリと冷たく、寂しげに佇む。

そんな前を、一人の女が通り過ぎた。

電柱スグ横、何の変哲もない二階建ての一軒家へと足を進めると、女はコートのポケットから両手をだし、口元でハーッと息を吹きかける。

寒ッ・っと言。

玄関まで階段を上がった女は、目の前のチャイムへと人差し指をかざす。

つと、スグに家内から誰かの足音が。

「お帰りの早いね」

「あー寒ッ・・・わりとスムーズに宿題進んでね」

「それよりも、ココア買っついてくれた？」

「朝、頼んどいたやつ」

「もちろん」

「テーブルに置いてあるわよ 自分で作って飲んでね」

「サンキュー さむさむ・・・」

「よいしょ・・・つと・・・」

「あ、コラー！」

「脱いだ服くらい自分で片付けなさい！」

家から出てきた女、霧島月夜キリシマ ムツクヨ は、コートを雑に脱ぎ捨てる妹、霧島陽夢シマ ヨウム をリビングへ行くよう促す。

来年から受験真っ盛りの高校二年生、霧島月夜はしっかり者だ。

対称的に楽観的な言動の目立つ中学3年生、霧島陽夢の脱いだコートを持ち上げる。

クリーム色のロングコート脱ぎ捨てた陽夢は、後頭部で二つに留めた髪を揺らし、

パタパタと奥へと走り去ってしまふ。

ため息をつき、後ろ姿を見つめる月夜。

あと数週間で高校受験を迎える陽夢のノリの軽さには、月夜は毎日ビクビクしていた。

万が一妹が受験を失敗したら・・・と考えると夜も眠れないのだ。両親が海外まで出張している今、妹を支えられるのは自分だけなのだ。と、彼女なりに重荷を背負っているようだ。

それに、中三に入った陽夢は、目に見えて服装が派手になった。

今も、真冬だというのにコートの下には丈の短すぎるスカートを履いて外出していた。

あんなに短いスカート穿いて恥かしくないのかなあ・・・

それに、世間にはおかしな男もいる。

姉の自分が言うのも何だが、陽夢はスタイルもいいし、顔も整っているので、いつ夜道を襲われるかと思うとゾっとする。

友達からはよく 姉妹似てるね と言われるが、そんなに似てるだろうか。

月夜は玄関横に配置されている鏡をチラ見する・・・つが、やはりよく分らない。

若干のクセっ気を二つで縛る陽夢に比べ、黒髪ストレートを何もいじっていない月夜。

外見からでも、十分に対照的な姉妹を表現できた。

「っきゃ」

つと、開けっ放しの玄関から強風が吹きこんだ。

肌がピリピリと痛むほど、冬の風は冷たい。

セーターで身を包んでいるにも関わらず、月夜はクシュッとクシヤ

ニを一つ。

「お姉ちゃあーん ココアどこに置いてあんのぉー？」

リビングの方から陽夢の声が聞こえてくる。

机の上にあるって言ったのに・・・

「テーブルの上をよく探して」

「みかんの陰に隠れて見えなくなってるかも」

月夜がドアを閉めようと、陽夢へと呼びかけながらドアノブを引く。ガチャンと音が響き、外界と玄関が遮断される音が月夜の手へと伝わってきた。

って、？

違和感を感じ、フと背後を振り返る。

ドアを閉めたはずなのに、何かがドアに引っかかったような感触が手に伝わってきたのだった。

倒れた傘でもドアで挟んだのか。木の棒でも落ちていたのか。いや、違う。

「え・・・え」

ドアに挟まっていたのは、足。

大きな大きな靴を履いた足が一本、ドアに挟まっていた。

そして、足の持ち主であろう人物。

女性の中では長身に分類されるであろう月夜を見下ろすように、頭三個分ほどの大男がドアの隙間から覗いていた。

全身を黒スーツで完全防備し、冷たい無表情顔には黒いグラサン。

「あ、あの・・・えっと・・・？」

ガタンッ

月夜の思考回路を停止させたのは、大男が片腕を振りかざした瞬間だ。

男の握っていた短い棒（ボール？）によって頭を強打したのだった。月夜は声を上げる事なく、一撃で地に沈められ、それきり動けなくなった。

新キャラ説明

1、霧島月夜 キッチリと人生を謳歌する女子高校生（二年生）
最近の妹（陽夢）の言動には心配する反面、自分らしさを表現できる度胸に憧れてる一面も。

2、霧島陽夢 楽しく人生を謳歌する女子中学生（三年生）
クラスでは浮くほどの美人だが、その明るい性格から友人は多い。つまり社交的。
勉強に若干のコンプレックスを抱いており、その点では姉（月夜）を尊敬する一面が。

3、大男

???

零 【招待】（後書き）

「は？w」ってなった人挙手！・・・あ、下ろしてください；；

次回からが本番ですよ！ グロ耐性、気の短い方は 観覧しない
事をオススメします。

巻 【制限じゃよ】（前書き）

皆さん、こんにちは！ 作者です！

えーっとですね、一話も始まってないんでなんとも言えないですが・

まあ、見て下さい。

一応注意書きしときますと、この話からスデにパロ臭が漂います。
っが、

気にしないで下さいね

巻 【刻限じゃよ】

「ん！ えちゃん！！」

ああ もう朝か・・・ 早く起きないと・・・
ご飯作って、洗濯して・・・ 学校行かないと・・・

「姉ちゃん！ お姉ちゃん！！」

陽夢の声・・・ 眠いけど・・・私がいっかりしないと・・・

「起きてよお姉ちゃんッ！！ 死んじゃだだよオ！」

しぬって・・・ 誰が・・・

陽夢 私 お父さん お母さん 受験 ご飯 洗濯 ココア 痛い
痛い 陽夢 泣いてる 男 殴られ

「ッ！？」

「あ、お姉ちゃん!!」

咄嗟に目を大きく開いた月夜の前には、覗き込むように陽夢が顔を窺っていた。

陽夢の両目からは大粒の涙がポロポロと零れ落ち、月夜の顔にも数滴涙が付着している。

一体、あの強気で頑固で大雑把な妹の涙を見たのは何年振りだろうか。小学生の時に飼っていたハムスターが死んでしまった時以来だろうか。

あの時の陽夢もギャンギャン泣いてたっけ

「どうしたの陽夢・・・何で泣いて　っ痛ッ」

瞬時し、頭へ針で突かれたような痛みが襲い掛かり、陽夢の目の前で蹲った。

つと、同時に、玄関前で大男に殴られた記憶も鮮明に蘇る。なぜ私は殴られたの？

「お姉ちゃん!ねえ大丈夫ツ!?!」

「う・・・うん・・・　大丈夫・・・だから・・・」

痛みをグツと抑え込み、顔をあげ　無理やり笑みを作ってみせる。だが、陽夢の顔色は一向に晴れない。

妹に悲しい顔をされると、姉も悲しくなってくる。

ボンヤリとした頭をフル回転させ、陽夢をギュッと抱きしめる。

「良かった・・・お姉ちゃん・・・良かったよお・・・」

「心配かけてごめんね」

「・・・もう大丈夫だから」

やっと泣き止んだ陽夢を自分の胸へ沈め、頭を優しく撫でる。

以前にハムスターが死んだときも、ずっとずっと月夜が泣き止ませてあげた。

普段意地を張っている陽夢も、年相応の女の子なのだ。

小さなシャックリを繰り返しながら、月夜の胸の中で震えている。

ところで、ここはどこだろう

月夜と陽夢のいる場所。

家でもなければ、知っている場所でもない。

一言で言えば、『和風の部屋』。俗に言う「書院造」だ。

月夜の通っている高校、その教室二つ分の広さはある。

足元には畳が敷き詰められており、目の前には小さな仏像。

それを囲むように数十本のろうそくがユラユラと火を波打っている。

小さな仏像ミニブツが飾られた台の横には、メチャクチャ存在感を放つ鎧武者。

ズッシリとした重量感と共に、小さなイスへと腰掛けていた。

自分から見て左、そこには襖。奥が分からない。

自分から見て右、そこには障子。外の様子が薄らと影で見える。

自分の背後、そこにも襖。同じく奥が分からない。大きめのタンスが一つあるだけだ。

360度、和風で覆われている。

いや、天井には蛍光灯がいくつも・・・電気でも通ってるの？つまり、今自分たちは書院造の一室に座り込んでいる状態なのだ。

だが、それよりも気になること。

『自分たち以外にも十を超える人々が同じ一室で座り込んでいる』

老若男女、様々な人々だ。

部屋のど真ん中で姉妹劇を披露していた月夜と陽夢へと視線が集まっていた。

それに気づいた月夜は、顔が赤くなるのを感じ取り、咄嗟に畳へと顔を伏せる。

陽夢も落ち着いたようで、月夜から顔を離し、隣にチヨコンと座った。

そんな二人に近づく一人の男。

「あのー 大丈夫ですか？」

「体調が優れない様子でしたが・・・？」

「えッ？」

「あ、いや もう大丈夫です・・・ 大丈夫です・・・ッ」

「そうですね？」

「無理をしないで下さいね・・・？ 何か・・・はい」

「あ・・・ はい」

月夜に話しかけた男、スーツを身にまとい、七三の髪型でメガネを
装備。

まさに、ザ・サラリーマンという風貌だ。

話しかけて来たのに、冷たい態度をとってしまった月夜は気まずげ
に周囲へ視線を配った。

なぜ皆、部屋から出ないんだろ・・・？

「あ、あの一」

「えッ！？ は、はい」

「何でしょうか？」

「なぜ、皆ここから出ないんですか？」

「・・・そもそも、ここどこなんですか・・・？」

サラリーマンは あっ・・・と言葉を詰まらせ、後頭部をポリポリと
かく。

何かおかしな質問をしたらだろうか・・・

「開かねえーんだよ どこもかしこも」

「そのこの襦も、障子も、全部」

「え」

サラリーマンの代わりに月夜へ質問を答えたのは、襦へと寄りかか

つっていた男だった。
部屋着なのだろうか、ラフな格好で腕組みをし、鋭い目つきで月夜を睨んでいる。
苛立ちを隠せない様子だ。

「そ、そうなんですよ」

「ここにいる全員が気付いたらこの部屋・和室ですかね・・にて」

「どの扉も開かなくて、どうしたもんかと頭を抱えている状況で」

「そ、そんなバカな事」

「本当だよお姉ちゃん」

「私も調べてみたけど、本当に 襖とかピクリともしないの」

「強行突破も無理だぜ」

いかつい男が呟く。

「蹴っても何してもビクともしねえ・・・」

「ホントどうなってんだよ・・・」

「そ そんな・・・」

月夜は半信半疑で他の人にも聞いてみようかと目を配る。

だが、十数人にいる人々全員が視線をアチコチに配っており、挙動不審にソワソワしていた。

どうやら、本当に何も分かっていないようだ。

「あ、でも」

「もしかしてアナタ達、ここに来る前・・・っていうか」
「連れて来られる・・・前・・・？」

サラリーマンが月夜と陽夢に問いかける。

「黒い服を着た大男に会いませんでしたか？」

「「ッ!？」」

「あ、やっぱり・・・」

サラリーマンが残念そうに呟く。

月夜の脳裏には、あの不気味な大男の全貌がフラッシュバック。
つと、恐怖と共に怒りも沸き起こる。

「その男が・・・関係してるのですか・・・？」

「あ、いやいやッ!」

「まだ決まったワケじゃないですよッ」

「ただ、ここへ来る前に男に会った人が大多数ってだけで」

「アイツが犯人に決まっとるやるがい!」

「ホンマ、何を平和ボケした事ぬかしとんねんッ!」

サラリーマンのセリフを、男のガラガラ声が遮った。

月夜達の背に位置する場所で座り込んでいた貫禄ある男、デップリとした中年が声を荒げたのだ。

大阪の人間だろうか。

「で・・・ですが」

「決めつけは良くないと言いますか・・・決めつけは視野を狭めます
ッ」

「もっと広い視野で物事を検証してみてください」

「なんやアンタ？」

「ワシが視野狭いつちゆうんかッ!? もっぺん言つてみいゴルア
!!!」

「あ、そうじゃなくてですね」

「社長、落ち着いて下さいや」

喧嘩腰になったでっぶり男の肩を掴むのは、対照的に細身で長身オ
ールバツクの、これまた紳士。

中年の知り合いなのか、大阪弁で社長と呼び、何かをゴニョゴニョ
と話し込んでいた。

「申し訳あらへんです みなさん」

「社長はイキリ立ってるだけです、気にせんといて下せえや」

「あ・・・はい」

「こちらこそ申し訳ないです・・・」

長身紳士とサラリーマンが軽く会釈し合っている。

大阪中年はともかく、月夜達の背後で同じく喧嘩腰になっていた敵
つい男が戦闘体制を解いたので一安心。

何故か陽夢も戦闘態勢に入っていた。

ここで問題起こすのはやめてね・・・ 陽夢・・・

ゴーン

「コッコッコツ!?!?」「」「」「」

突然、ミニブツの置いてある仏壇から、低い低い鐘の音が一室に響いた。

場にいた全員　　18人　　がビクリと肩を浮かせ、仏壇へと視線を送った。

「なんの音なんや今のは」

「誰かがデツカイ屁でもこいたんか？」

大阪中年ただ一人がシャレを飛ばす。もちろん、全員がスルーしたのだが。

「えつと・・・何の音・・・？」

仏壇の近くで偶然座っていた女。

長い茶髪を揺らせ、高そうな服で身を包んでいた。

そんな派手な女がゆっくりと警戒しながら仏壇に歩み寄る。

ポンツ

「きゃあ!..!」

派手な女がミニブツを覗き込んだ瞬間、ミニブツの頭が破裂した。そこからは少量の煙、つと、一枚の画用紙サイズの紙。

腰を抜かしてしまったのか動けない女をしり目に、次いで近くに居た少々ポツチャリしたおばちゃんが紙を拾う。紙をマジマジと見つめるおばちゃん。忙しなく首を傾げていた。らちが明かないと、サラリーマンが歩み寄る。

「あの一　何か書いてあつたんですか？」

「え、ええ・・・　何かの絵・・・　ですかねえ・・・」

ふっくらオバちゃんとサラリーマン。

二人揃つても首を傾げるばかりだ。周りの人々も、そろそろ二人の周囲へ集まつてきた。

勿論、月夜と陽夢もだ。

次いで、蔵つい男、大阪弁の二人もゆつくり歩み寄ってくる。

月夜と陽夢も、手渡しで回ってきた紙を見る。

触つて気付いたが、この紙は半紙だったようだ。習字で使うような。

「・・・お姉ちゃん、何これ」

「・・・えつと・・・　鳥、なのかなあ？」

画用紙サイズの半紙には墨で絵が描かれていた。

これは、人間の四肢にデツカイ羽が生えたような、人間鳥・・・？半紙の真ん中にはデツカイ文字で『酉』

「何だこりゃ」

「『酉』・・・　『とり』なのか？」

厳つい男が首をひねる。
半紙には人間鳥の絵に、『酉』の文字。
場の全員がフォームと首を傾げている。

『時を刻むのじゃ』

「きゃあ！　しゃべった！！」

と、ミニブツから声が発せられた。
弾き飛ばされた顔は無くなっており、断面の首から声が発せられたのだ。
無駄にイケボなのがムカツク。

『壹拾』 『九』 『八』 『七』

「お、おい！！」

「何のカウントダウンだよッ！！」

『六』 『五』

「何なの・・・？　何なのよお・・・」

「皆さん落ち着いて！！」

「慌ててはダメですッ！！落ち着いて下さい！！」

「うつせえリーマン！　指揮ってんじゃねエ！！」

『四』 『参』

「何や！？何がおこつとんや！？」

「おい黒崎ッ！こりゃあ、どないなつとんねん！！」

「落ち着いて下せえ社長ッ！」

「ただのイタズラでっせ！」

『貳』

「仏像から離れて陽夢ッ！」

「出来るだけ、出来るだけ離れるのよッ！」

「わ、分かつてるよお姉ちゃんッ！」

「つて、痛い痛いッ！」

「足踏むないでよデブッ！！」

陽夢の小さな足を巨漢のデブ男が事故で踏んでしまう。

顔に汗を浮かべたデブ男はずり落ちたメガネを直す余裕もなく、咄嗟に陽夢へ頭を下げた。

「あッ！ごめんなさい・・・」

「うわあああ！！」

『壹』 『零』

『刻限じゃよ 刻限じゃよ 刻限じゃよ 刻限じゃよ』

パン パン パン

ミニブツからは何も起こらなかった。

だが、ミニブツがゼロと言った瞬間、左右の襖に障子が一斉に解放

されたのだ。

敵つい男やサラリーマンが試しても開かなかった襖、障子が、一斉に横へスライドしたのだった。

一瞬の沈黙の後、大阪中年が大声を上げた。

「な、なあんやコレ」

「襖が開いてもうたやんけ もう帰ってええんかいな？」

「え、そんなバカな・・・？」

「いくら引っ張っても開かなかったのに・・・？」

「何コレ 帰っていいの？」

ざわざわと忙しない空気になってくる。

緊張感が一気に解けたのだ。

「終わったのーコレ」

「テレビのドッキリ？ あー、カメラどこ？」

「早く夕飯作らないと・・・」

「ところで何時かしら？ どなたか時計持ってる方いらっしゃる？」

「・・・」

「よっしゃ帰るで黒崎ッ！」

「はよせんと会社が倒産してまうつての！ガッハッハ！」

「はい・・・社長・・・」

「・・・何だったんでしょうね、コレ」

人々が一斉に腰を上げ、解き放たれた障子へと向かう。障子の先は外。薄暗くはなっているが、間違いなく外へと繋がっているようだ。

サラリーマンはポカンと口をあけ、月夜と陽夢も啞然とその様子を眺めていた。

「終わったの・・・かな」

「もう、帰っていいのかな？ お姉ちゃん」

「え、っと・・・ いい・・・んじゃない？」

「障子も開いたみたいだし・・・」

「あ・・・ ああ・・・」

「ちょ、ちょっと大丈夫ですかッ？」

「あの、あのッ！ もしもーし!？」

「えッ！あ、ああ」

「ちょっとビククリしちゃって・・・」

「てつきり拉致されたとばかり思っていましたから・・・」

「男のクセにネガティブ思考はないわー」

「痛ッ！」

「くらッ！ 陽夢ッ！」

茶番を繰り広げる三人はほっととき、大阪中年が室内から、一步外へと出る。

「こりゃあ・・・どこなんじゃ・・・？」

目の前に広がるのは小石の敷き詰められた地面。
小さな池がいくつもあり、緑の植物が所々見受けられた。
さらに奥には数メートルある壁。
石造りの壁だった。

どうやら、大きな和風屋敷の一室に閉じ込められていたようだ。
渡り廊下へと進んだ大阪中年に続き、そろそろと人々が地面へと降り立った。

「はあ・・・」

「こんなデカイ屋敷があつたんかあ・・・」

「・・・もう、化粧が崩れてるじゃない・・・ブツブツ・・・」

「急いで帰らないとな 正志を保育園に預けっぱなしだ」
「家帰ったら俺が車出すからな」

「そうね お願い」

「先生方にも迷惑がかかるし、急いでね」

「あいたた・・・ 足が痺れて上手く歩けんわい」

もう帰れる。 誰もがそう思っていた。

「引き返せえええ！！ 部屋に戻るんだああああ！！」

つと、暗闇の奥から男の声が飛んできた。

最初に気付いたのは長身紳士だ。

次いで大阪中年、背後の人々。

一瞬足が止まるも、出口を探すためにゆっくりと歩みを再開する。

「やくねえ ウルサイ声」

「何かあったのかしら」

「え、なに？ 事件??」

「事件なの？ 怖いなあ」

「速くツ！部屋に入れエエエエ!!」

「奴ら が来るぞおお!!」

「何やツ！さつきからうつさいのお!!」

「これ以上なんの茶番に付き合わせるつもりなんじゃあ!!」

暗闇へ怒鳴り返す大阪中年。

その頭上。大阪中年及び長身紳士、その他大勢の人々の頭上から何かが数個降り注いでくる。

キラリと暗闇で光り、真つ直ぐと落下してくるソレは

「伏せろ!!!」

ドシュ　ゲシュ　ドシュシュ

口ばしをギラつかせた『鳥』が、人々の頭蓋骨へと突き刺さっ

た。

ダラダラと鮮血が額、鼻を伝い落ち、地面へと滴る。頭上に穴をあけられた長身紳士、ふっくらオバちゃん、ケバい女に腰の曲がった老人。

運の悪かった四人の男女はゆっくりと膝から崩れ落ち、地面へ額を打ちつけた。

それきり動かない。

大阪中年が声と呼べない奇声をあげ、次いで後ろの人々が四方八方へ散り散りに逃げ出したのは言うまでも無いだろう。

新キャラ説明

- 4、 サラリーマン 「田中誠二」生存 『始まりの部屋』
- 5、 厳つい男 「新藤加羅」生存 『右庭』
- 6、 大阪中年 「金田信三」生存 『中庭』
- 7、 長身紳士 「黒崎洋一」死亡 『中庭』
- 8、 派手な女 「篠原岬」生存 『始まりの部屋』
- 9、 デブ男 「上野元太」生存 『始まりの部屋』
- 10、 謎の男 「????」生存 『中庭』

残り
18人
14人
+

巻 【刻限じゃよ】（後書き）

読破おめでとつございます。

このテンポでストーリー展開して行くので、一話がダメな人はもうダメですね。

別の作品をお読みください。

さてッ！ これが面白エーwwってなった人は、次回以降もつとつと面白いストーリーをご用意しております！！
ぜひッ！ 次回も読んでくださいね！

ではまた次回で、バイバーイノシ

弐 【死にたくない】（前書き）

最近寒いですね。

主に財布の中とか、心とか・・・。

今回の話からが本番です。

キャラが若干説明口調ですが、気にしたら負けだと思えます。
僕だって気にしてないんだから、許してね。

貳 【死にたくない】

「じゃあ、僕も帰りましょうかね・・・」
「あ、お先に失礼しますね」

「はい 心配をおかけして申し訳ありませんでした」
「ほら、陽夢もお礼ちゃんと言って」

「えー だって私、何もしてもらってないよ」

「いいからッ・・・もお・・・」
「お姉ちゃんが迷惑かけたんだから 妹もお礼言っのが社交辞令つてもものなの！」

「ははは・・・ 迷惑だなんて・・・」
「実質 僕は何もしてませんしね・・・」

「・・・根暗な男・・・」
「痛ッ！」

「陽夢ッ！！」

ははは と愛想笑いを浮かべたサラリーマンは、部屋の出口へと向かって行く。
萎びた背広が哀愁感を漂わせており、見ているコツチも暗くなるよ
うな男だ。

「わ、スゴイこれ」

つと、派手な服を着ている女が声をあげた。
独り言のつもりだったのだろうが、近くに居た月夜と陽夢の耳には
声がしつかりと聞き取れた。
派手な女はダンスの前で中を漁っており、キラキラと目を輝かせて
いる。

「あの派手な人 何見てんだろ」

「さあ・・・ 人ん家のダンス勝手に漁っちゃダメなんだけど・・・

」

「ココって人ん家なのか？」

「ねえねえ アナタ達もコツチ来てみなさいよ」

派手な女が霧島姉妹を手で軽く招く。

えっ と躊躇した月夜だったが、陽夢がスグに飛んで行ったのを見
て、渋々といった様子でダンス前へと足を運んだ。

先に到着していた陽夢の後ろからダンスを覗き込んだ月夜。

その中には

「『巫女装束一式』に『紋付羽織袴一式』・・・ 滅多に見れる服
じゃないでしょう・・・？」

派手な女がうつとりした口調と仕草で陽夢の顔を撫でまわす。

一瞬怪訝な顔をするも、満更でもないのか 手は取り払わないよう
だった。

確かに珍しい服がタンスに入っているものだ。

ベタな白衣に朱袴、神社にいる巫女さんが着ている上下一式。黒羽織に中へ着る黒い長着、色とりどりの袴。

どちらも今いる和風な屋敷には丁度良い服・・・なのか？

「ねえアナタ達・・・？」

「三人でこの巫女装束来てみない？」

「えッ！ アナタ何言って」

「いいじゃないの別に」

「こーゆう服って一式揃えるには結構な値段になるのよー？」

「機会が無いと着られないじゃない」

「機会って・・・別に着る意味が」

「面白そうだねそれ！」

「お姉ちゃん、着てみようよ！ 大丈夫、スグに着替えちゃえばバ
れないって！」

「で、でも・・・」

「んー？ 何なのー？」

「別に躊躇う事無いでしょ？」

「その・・・ちょっと恥ずか いや、その」

「人の服を勝手に着ちゃダメって言うか・・・」

「とか言って、お姉ちゃん、恥かしいだけなんじゃないの？」

「べ、別にそういうワケじゃ」

「じゃあ決まりね!」

「早く着替えちゃいましょ!」

つとと言うや、スグに上着を脱ぎだす派手女。

その様子を遠目で見ていたデブ男は、陽夢の睨みつけによって自然と部屋を追い出される形となってしまった。

渋々、自分のセーターに手をかける月夜。

ノリノリの陽夢はすでにスカートを脱ぎ捨てていた。

同時刻 中庭

「何なんやコレエ!」

「ひっひ・・・何が起こったんのじゃああ!」

大阪中年は叫びながら庭を疾走していた。

でっぴりと腹回りにこびり付いた脂肪が邪魔をし、全然速く走れない。

先に逃げた人々の後姿がドンドン小さくなっていく。

「あ」

大阪中年の斜め前、必死に走っていたショートカットの女の片足に黒鳥が突き刺さった。

地面に転び、必死に手足をバタつかせている。

つと、突き刺さった口ばしが大きく上下に開かれ、バスンつと鈍い音を発し、女のふくろはぎが大きく裂けた。

肉と鮮血が地面に巻き散る中、女の悲鳴がより一層甲高いものとなる。

「あああああああー!!」

トトトトトト

もがき苦しむ女の体中に、空から降ってきた数匹の黒鳥が突き刺さる。

痛みから解放された女は口からコップ一杯分の血液を地に撒き、動かなくなった。

一部始終を見ていた大阪中年の方を、女の体に刺さった黒鳥の目玉がギョロリと向けられた。

背筋が凍る大阪中年。

バスンバスンバスン

黒鳥の口ばしが大きく開き、女の肉を体内から弾き飛ばす。

つと、羽を羽ばたかせ、空へと舞い上がっていく。

「ひ、ひイイイイ」

次の標的に選ばれたことを察した大阪中年は、必死に他の人々の元へ走っていく。

大勢の人々は一か所で固まっていた。
石壁を伝った先に見つけた大きな門の前でだ。
木製の立派な門を必死に全員で押したり引いたりしていた。

「早く！つせーの……押せエエエエエ！！」

「全然……ビクともしない！」

「どうにかしてよ男ども！早くどうにかしてよ！！」

「るっせーぞババア！！」

「アンタ！どうにかしてよ！」

「このままじゃ全員殺されるんだよ！？」

「分かってるわいッ　つくうつう……」

「駄目だ　ビクともしないぞこの扉」

「押せエエエエエ」　「エ」

「きゃあああああああああ！！」

スーツ姿の男の頭に黒鳥が突き刺さった。

つと次の瞬間、無数の黒鳥の群れが群衆の頭上から降ってきたのだ。
一か所に集まった人間を狙い撃ちしたのだ。

黒鳥によって穴をあけられ、ほじくられ、絶命させられる惨劇。阿鼻叫喚、地獄絵図。

扉を必死に押していた私服の若い男、メガネをかけた女、パーマをかけた老人 e t c　黒鳥によって鮮血と肉を撒き散らすこととなった。

そんな惨劇を間一髪でかわしたロン毛の男やピアスを開けた女など、若い年齢層の人々がさらに屋敷の中へと逃げ出す。数メートル後ろで様子を見守っていた老夫婦も、屋敷の中へと避難を開始したようだ。

走りながら大阪中年は必死に頭を回転させる。

一体何が起きているのか、なぜ鳥が人を殺すのか、全く身に覚えがない。

「あああああ！」

大阪中年の脇腹に、地面と平行にボウガンの如く飛んできた黒鳥が突き刺さる。

焼けるような痛みが大阪中年を襲い、脳へと一気に危険信号が駆け巡る。

ノドがカラカラに乾き、小便が地面へと散らされた。

つと、先ほどの女を思い出す。

このまま鳥を放置すれば、口ばしを開いて鳥は人間の肉を弾き飛ばしていた。

そうなれば絶命は確実だ。

「ぎっひっひひひいひいひい！！」

決断するよりも早く、ほとんど本能的に右腕を刺さった黒鳥へと向ける。

鳥の体をしっかりと握りしめた大阪中年は一気に体外へと黒鳥を引きずり出した、つと同時に今と比べものにならない痛みが全身を襲った。

一瞬意識が飛びかけるも、周りの脂肪が功をなしたようだ。

一種の防衛手段として機能してくれたおかげで、失神せずにすんだのだ。

「こんの・・・鳥風情がア！」

地面へ勢いよく掴んだ黒鳥を叩き付ける大阪中年。

鈍い音を発したと同時に、バウンドもせずに黒鳥は地面で顔を半壊させる。

後ろをチラリと振り返る大阪中年の背後では、空から黒鳥が二匹自分を見据えていた。

「ひい・・・はひい・・・」

大阪中年の目指す先には、ヨタヨタと歩く老夫婦。
腰の曲がり切った老婆の手を必死に引いて歩く老人の二人組だ。
すぐ背後まで迫る大阪中年。

「ひいひい・・・もうすぐだ婆さん」

「家に入れば・・・ひい・・・安全だあ・・・」

「もういいですよ道夫さん・・・」

「十分長生きしましたから 最後は静かに・・・」

「駄目じゃ婆さん！ 自分の死ぬときぐりゃあ自分で決めるんじゃあ」

「・・・ひいひい・・・ ワシが死ぬまで死んだら ひい・・・ダメじゃぞ婆さん・・・」

走ってろれつの回らない老人。

今にも心臓が止まりそうな声を発していた。すごく苦しそうだ。

「道夫さん……」

「私はアナタと出会えて本当に良かったと思ってますよ……」

「わ、ワシもだ婆さん」

「だから……これからも…… はあツカハ…… 一緒に……」

「どけエ！ 老いぼれが、さっさとどかんかい！」

「ぎゃあ！」

思い切り体を老人に打ちつけ、地面へ転がす大阪中年。

老人は頭を強打したのか、口からぶくぶくと泡を吹かせて動かなくなってしまった。

道夫さん！つとガラガラ声で叫ぶ老婆をしり目に、大阪中年は屋敷の方へと出来る限りのスピードで走り寄る。

脇腹から溢れ出るどす黒い血液を必死に両手で抑え、先ほど目覚めた部屋へと急ぐのであった。

『始まりの部屋』にて

「ひゃっほー！これ可愛いー！ー！」

「私、初めて巫女装束なんて着たよお！」

「あー、やっぱり上物は違うわぁ・・・」

「あらー陽夢ちゃん 似合ってるわよー？」

「篠原さんも似合ってますよ！」

「大人の巫女つて感じで！！」

「あらあら ありがとうお」

「着てしまった・・・」

「人のものを勝手に着ちゃった・・・」

巫女装束に身を包んだ霧島月夜、陽夢、篠原岬はお互い個々の反応を楽しんでいる。

白衣の下には何も着用していないためか、胸元がかなりハッキリと型取られていた。

その中でも岬の胸が段違いで大きき 自重 。

つと、その時。

障子の外、渡り廊下からドタドタと複数の足音が響く。

その足音は真っ直ぐに三人のいる部屋へと向かっていた。

「助けてえええ！！」

「やべエ！来るぞ！あいつらが来るぞ！！」

部屋に飛び込む男女二人。

男は肩まで長い長髪を振り乱し、女は履いたスカートの事など気にせず、畳の上をゴロゴロと転がっていた。

次いで、小走りで駆け込む帰ったと思っていたサラリーマンに、部屋を追い出されたデブ男。

後者の二人も顔を青ざめてヘナヘナと畳に座り込んでしまった。

駆け込んだ四人は全員がブルブルと震え、大きく息を荒げている。陽夢が近くで転がっているピアス女へと駆け寄り、何かと問いたです。

「そこで、その・・・鳥が 鳥に・・・襲われて」

「一杯・・・たくさん死んで・・・みんな死んじゃって・・・ッ！」

「何を言ってるのアンタ!？」

「鳥? 死ぬ? ちよつと、誰かコイツ翻訳してよ!」

「本当なんだって!」

「目の前で一杯死んで! 俺の目の前でも夫婦とか、おっさんとか・・・みんな鳥に殺されたんだよ!」

長髪青年が必死に陽夢に訴える。

「はあ?と言った口で睨む陽夢の背後では、月夜と岬、サラリーマンの三人で相談中。」

「一番マトモそうなのサラリーマンに現状を伝えてもらおうと踏んだのだ。」

「何それ! 鳥が人を貫く!?!」

「アナタ、自分で言ってる意味が分かっているの!?!」

「本当なんですってえ!」

「証拠に僕の目の前でも人が、しし・・・死んで・・・」

「・・・アナタねエ」

「落ち着いて岬さんッ！」

「多分この人は混乱しているだけなんですよ」

「だからきつと・・・幻覚か何かを」

「本当ですつてば!!！」

あちこちで怒鳴り声をぶつけ合う。

突然の事に混乱するのは当たり前前の事だった。

「って、デブ男」

「アンタ何してんの？」

陽夢がタンスの前で忙しくしているデブ男に向かって話しかけた。
デブ男はゆっくりと陽夢達へと向き直り、一言。

「汗掻いちゃったから、服着替えようかなって」

タンスの中の紋付羽織袴をあさり始めた。

「・・・見ないでくれよ」

「見てないわよッ!!！」

デブ男は上着を脱ぎ去り、長着を首へと通している。

関わるのはやめようつと、陽夢はピアス女への尋問を再開させようと向き直る。

つと、その時。

「おいッ！無事かッ！」

突如、屋敷の奥からとある人物が踏み込んできたのだ。

その男は前髪で目が隠れ、無精ひげをボチボチ生やした小汚い風貌。だが、異常なのは服装だ。

全身、紋付羽織袴でキチツとした服装なのだ。

片手には日本刀を、腰には扇子を差し込んでいた。

もはや、どこの江戸武士だ と突っ込みたくなってくる。

「どこの江戸武士だお前！！」

ああ、陽夢…… アナタは皆の言い出せない疑問を簡単にぶつけてくれるのね……

「説明しているヒマはない！」

「スグに着替えるんだ！！」

「は、はあ？ いったい何に？」

「何で？ として？」

「タンスの中に全員分の装備が収まってるから って、もう君たちは着替えているじゃないかあ！」

「え、ええ？」

陽夢、月夜、岬に歩み寄る武士男。

その気圧に若干押されつつも、陽夢はガンを飛ばし続ける。

月夜と岬はポカンとするばかりだ。

「ナイス判断だ君たち 実にすばらしい」

「さあ！他の人たちも全員、服を着替えて！！」

「着替えるって・・・巫女服にかッ！？」

「違うぞロン毛青年」

「巫女装束は女用、男用は今俺が来ているタイプの装備だ」

「は、はぁ・・・」

「さあ、そこで転がってる君も巫女装束に着替えるんだッ！」

「このままじゃ死ぬんだぞッ！？」

「な、なによアンタ！触るな！」

「ただだ、誰がそんなダッサー服着るかよ！！」

「君も見たんだろう？ 外での殺戮を」

「このままじゃ『西』に殺されて ウッ」

「きゃあああああ！！」

男が言い終わらないウチに、鳥たちはやってきた。

障子の開き切った外部から黒鳥の大群が一齐に『始まりの部屋』へ特攻してきたのだ。

鋭い黒きナイフのように部屋へと突っ込んできた無数の黒鳥たちは、次々に壁やら人間やらに突き刺さっていく。

まるで、外から何丁ものマシンガンで乱射されたような、そんな絶望感であった。

ロン毛青年は、黒鳥によって　まるで踊るかのように体を激しく動かし白目をむく。

床で転がっていたピアス女の全身へと黒鳥が突き刺さり、まるで釘打ち機で撃ちこむようにビクンビクンと痙攣しながら昇天しきっていた。

月夜達も例外ではない。

その部屋にいた全員の体へと黒鳥の口ばしが突き刺さった。

「あああああああ！！！」

そんな、部屋が黒鳥で覆われかけた中、武士男は体に刺さった黒鳥を気にも留めず、両手で日本刀を振り回し始めた。

日本刀に触れた黒鳥は次々と体を分解、切断され、畳の上へと落ちる。

切断されるたびに黒鳥の内臓が畳へと撒かれ、染みこんでいく。顔や全身に黒鳥の返り血を浴びている武士男は日本刀をさらに激しく振り回し始めた。

すでに足元には数えきれない黒鳥の部品の山が出来始めている。

「つりやあああああああ！！！」

「どうだああああ！！！」

黒鳥たちは、こりやたまらんと叫んだ様子で、一斉に『始まりの部屋』を後に飛び立っていった。

人間に突き刺さった黒鳥も、口ばしで肉をこじ開け、仲間たちと共に飛び立つ。

部屋に残されたのは、元人間だった肉片と、切り落とした黒鳥の肉片のみだった。

畳はどす黒く染まり、色濃過ぎる鉄さびの異臭で息が詰まるレベルだ。

「・・・え、ええ・・・？」

黒鳥の山がモソモソ動き、下から体を起き上がらせたのは月夜だった。

次いで、すぐ両隣からは陽夢、岬が体を持ち上げる。

黒鳥が突き刺さったハズなのに、三人はケガらしいケガはない。

代わりに、巫女装束のあちこちに黒い斑点のようなものが発生していた。

「・・・遅かったか・・・ツクソ」

武士男が呟く。

足元で無残に体中に穴をあけた若い男女を見比べ、唇をギュッと結んだ。

眉間にシワがより、握った刀にさらに力が込められたようだ。

「あ・・・あ・・・」

「嘘　こんなのって・・・ッ！」

「・・・マジで？」

月夜の目の前、そこには見慣れたスーツがボロ雑巾のように散らかされていた。

そう、月夜へ最初に話しかけてきたサラリーマンのスーツだ。

近くにはゴツソリと髪の毛が頭皮ごと捨てられていた。

脳髓と思われるピンクの物体に交じって、半壊した黒縁メガネが。

「いや・・・いやあ・・・」

「こんなの・・・おかしいよ・・・」

「・・・この人たちが言っていたのって、本当だったのね」

「大丈夫、月夜ちゃん 意識をしっかりと持って」

「いや・・・いやああ・・・」

「ねえ、アンタ・・・」

「無精ヒゲのアンタよ!!」

陽夢が武士男へと突っかかる。

キツめの口調ではあるが、両目からは涙が溢れでそう。

武士男はゆっくりと陽夢に面向かった。

「どうしたんだ？」

「どうしたんだ・・・じゃ、ないわよ!!」

陽夢は声を荒げる。

「一体何が起きたって言うの!?!」

「この鳥はなに!?! ここはどこ!?! なんで人が死ぬのよ!?!」

「アンタは誰!?! あの鳥はなに!?! どうやったら帰れるのよお

!?!」

ため込んでいた疑問を一気に武士男へとぶつけた様子だ。

月夜と岬も同意見だ。

今すぐに、目の前で起きた非現実的な現状を問いただしたい気持ちで一杯だった。

ふうーっと深呼吸をする武士男。
長い前髪の隙間から、片目をキラリと覗かせる。
日本刀についた血や油を指でなぞりつつ、陽夢の質問を丁寧に回答
しました。

「俺の名前は武藤^{ムトウタケル}猛 38のフリーターだ、って言うか、フリータ
ーだった だな」

「今じゃあ、ずっとここで、こんな妖怪相手に刀振り回してんのよ」
「ここがどこかは知らん 日本のだっかって事だけだな」

「・・・結局自分の事しか分かってないじゃないの」
「それに、ずっとここであって どうゆう事なのよ!」

「まあ、待て」
「今じゃ こうやって話している間も危険な状況なんだ」
「いつ今みたいな奇襲があってもおかしくない」

「そんな」
「あの鳥がまた襲ってくるっていうのッ!」

「親玉を倒さない限り、やつらは無限に湧き続けるぜ」
「親玉を倒すか、俺らが全滅するか・・・」
「こりゃ、戦争なんだよ」

あまりの超展開に思考回路が追いつかない陽夢。
月夜と岬も同じだ。
3人そろってポカンとしていた。

猛は一言。

「死にたいのか？」

「は？」

思わず素で聞き返す陽夢。

「質問に答えろ」

「お前らは死にたいのか？と聞いている」

陽夢は月夜、岬と顔を見合わせる。

全員の答えは一つだ。

言わなくとも分かる。言わずもがな。

「」「死にたくない」「」

迷いの無い声。

「……いゝ返事だ」

「よし、黙ってオレについてこい」

三人に背を向ける猛。

「それから、デブさん」

「いつまで寝たふり決めこむつもりですかい？？」

猛は黒鳥たちによってボロボロにされた障子から、一步外へ出る。

つと、穴だらけになり倒れたタンスの下がゴソゴソ動きだし、紋付羽織袴をまとったデブ男が起き上がった。

居心地が悪そうに服に着いた汚れをパンパンと払っている。

どうやら、彼も黒鳥の襲撃を交わし切ったようだ。

いや、月夜は考える。

今自分が着ている巫女装束、これのおかげで黒鳥の襲撃を耐えきったのだ。

原理は不明だが、この装束は命の次に大切なものなのかもしれない。

デブ男もまたしかりだ。

武藤猛と同様、紋付羽織袴のおかげで命を救われている。運がよかったのだらう。

だが、もし。もし自分が今 巫女装束を着ていなかったらと思つと、ゾットする。

岬さんからの巫女装束を着ようとの誘いを断っていたら・・・

あのまま、真っ直ぐ家に帰ろうとしていたら・・・

月夜は、チラリと陽夢を見る。

強がってはいるが、体はかすかに震えていた。

自分のために涙を流してくれた大事な妹。

絶対に失うわけにはいかない。そう、命に代えてもだ。

姉として、大事な妹を、絶対に陽夢は守って見せる。

こうして、命を懸けたサバイバルゲームは始まった。

新キャラ説明

1 1、ショートカットの女 「安部ひとみ」死亡 『中庭』

1 2、老夫婦 「新馬道夫」 「新馬弘子」死亡 『中庭』

1 3、ロン毛男 「長谷川楔」死亡 『始まりの部屋』

1 4、ピアス女 「真野浩美」死亡 『始まりの部屋』

1 5、武士男 「武藤猛」生存 『始まりの部屋』

残り 1 8人 1 4人 7人+

式 【死にたくない】（後書き）

読破お疲れ様です。

突然ですが、選択肢をお選びください。

- 1、なにこれwつまんねw
- 2、結構好きかも

1を選んだ人〃ごめんなさい・・・ 次話から頑張るので見捨てないで・・・

2を選んだ人〃（ドヤツ

さて、それでは次回、またお会いしましょう。
バイバイ

参 【甘えるな】（前書き）

晩飯を買おうとコンビニに向かった矢先、財布を拾いました。

「不用心だなあ」と思いつつ中を覗いてみると、万札が五、六枚。

・・・悲しい事ながら、最近は何騒な世の中です。

このまま財布を放置すれば、確実に盗まれるでしょう。

そして、私利私欲で金銭のやり取りを・・・アー怖い。

だがしかし！ 僕がそんな野望を阻止してやる！

僕はそつと万札と免許証を抜き取り、財布を地面に置いた。

これで悪用はされない。危なかったあ・・・

い。こんな作者が書いた小説、よかつたら最後までお付き合いください。

参 【甘えるな】

左庭の端には廁がある。

小さな池を橋でまたいだ先にある空間だ。

五つの小さな小屋のような建物。

それが廁（便所）であった。

その中、左から二番目に新藤加羅（厳つい男）はこもっていた。

木の壁に寄りかかり、震える体を抑え込むように腕を組んでいる。

加羅が廁へ来たのは成り行きだ。

どうせ真つ直ぐ帰るなら屋敷を軽く見て行こうかな と、そんな軽い気持ちで団体行動から離れたのだ。

この遊び心が彼の命を救った。

中庭で行われた惨劇を回避したのである。

だが、彼は見てしまった。

自分の方へ必死に逃げてきた男性が、目の前で鳥の群れに駆逐されるのを、見てしまった。

鳥に見つかる前に加羅は近くの廁へと潜り込んだ というわけだ。

落ち着け、俺 これから一体どうする・・・？

どうやって鳥に見つからずに屋敷から抜け出すかを考える。

っが、全く妙案が浮かばない。

こんな事ならしっかりと義務教育を受けときゃよかつたぜ。

「・・・さて、どうすつか・・・な・・・あ？」

「・・・あ？」

厠のドア、地面とドアの隙間から小さな黄色い小鳥が侵入してきた。さっきの男を食っていた黒鳥とは違い、二回りほど小さなヒヨコのような鳥だ。

だが見た目で判断してはいけない。

「……………」

ピーピー

「……………」

ピーピー

「……………」

ビピッ！！

「なッ！？」

つと、突然黄色い鳥の様子がおかしくなる。

腹部が三倍近くまで膨れ上がり、顔などの部分を圧迫したのだ。眼球が飛び出そうなほど顔を圧縮し、小さな口ばしからは変色した舌をデロンと垂れ下げている。

キューキューと苦しそうに息を吐く小鳥の体は、すでに五、六倍は膨れ上がったのではないだろうか。

「やばいッ！」

加羅は咄嗟に小鳥を避け、ドアを蹴破る。

厠を飛び出した瞬間、まさに間一髪。

鳥の体中から黄色い煙が噴出されたのだ。そんな小さい体のどこに溜めといたんだ　と聞きたいほどのガスが厠を充満する。

つと、次の瞬間には木製の厠が溶け出した。

「なんだあ、こりゃあ・・・」

目の前でドロドロに溶ける厠を茫然と見守る加羅。開いた口が塞がらない。

でも、こんな所でクヨクヨしてらんねえ・・・
早く　こんな所からはおさらばしねえと

「あ？」

加羅の目の前に、黒い羽がフワリとゆっくり落下した。

地面にポトリと落ちるのを見届けた加羅は、静かに空を見上げる。

「・・・は・・・はは」

思わず笑ってしまう。

頭上には、数えきれない量の黒鳥の群れと、それを率いるように先頭で凜と立つ一人の人物（？）が。

黒鳥のように黒い羽を二枚もち、全身を黒い布で覆うように着飾った人物。

顔には下半分を黒布で全身同様覆い隠し、長い長い漆黒の髪を前髪から全てオールバックの要領で背中へ廻している。

身長半分、またはそれ以上の髪の長さだ。真っ黒な。

その手には長い槍。

自分と同じ人間の顔をしているのに、その両目は恐ろしく冷酷。

その背後で羽ばたく無数の黒鳥が、そんな鳥人間を輝かしく主張させていた。

さながら、その姿は漆黒の死神だ。

足に違和感を感じ、加羅は咄嗟に足元を見た。

そこにはヒヨコのような、先ほどの小鳥が十数匹。

つぶらな瞳でコツチを見ている。

やべえ っと思ったのも束の間。

覚悟を決めて両目を閉じる加羅。

こんなの逃げ切れるハズがねエ・・・。

ピーピーピーピーピーピーピーピーピー

ピーピーピー ビッピュッ！！

っと、加羅の足元に何かが飛んできた。

目を開け、それを確認する。

それは、一本の矢。一本の矢の先には体を撃ちぬかれたヒヨコもどき。

二本目が足元に突き刺さる。

その先には、やはりヒヨコもどき。

矢と地面に縫い付けられたヒヨコもどきの傷口から、黄色い液体がドロドロ地面へ流れ込んでいた。

加羅は目を凝らす、っと、屋敷の屋根から弓矢を構える人物。栗色の髪を風になびかせ、紋付羽織袴を身にまとった一人の小柄な少年が矢を放っていたのだ。ヒュン　っと音が鳴ったと思うと、加羅の足元に三本目が突き刺さる。

加羅は状況を判断し、急いでヒヨコもどきの群れから脱出した。彼の邪魔になると判断したからだ。

四本目の矢が飛ぶ。っと、その矢先には油の染みこんだ巾着袋が。勿論ヒヨコもどきを一匹撃ちぬいている。

次の五本目。

構えた矢先には、激しく炎が燃えていた。強風が吹いても消えそうにない激しい炎。

紋付羽織袴姿で火矢を構える少年は、非常に凛々しく、カッコ良く・
・加羅の目には写った。

っが、天空でその様子を静かに見つめていた鳥人間が、片手を栗色髪の少年へと向ける。

背後の黒鳥は一斉にキヤーキヤー鳴きだし、口ばしと体の構造を変えていく。

そして、一本のナイフのように変形した黒鳥たちを見渡し、鳥人間は片腕を振り上げ、スグに振り下ろした。

次の瞬間、黒鳥は加羅達が散々見てきたように、マシンガンの如く栗色髪の少年へと剛速球で飛んでいく。風を切る音が聞こえてきそうな程速い。

あ　　と言つ間に栗色髪の少年へと突き刺さる　　と思いきや、両

者の間に一人の男が割って入った。
少年と同じく紋付羽織袴を身にまとった長身の男が、二本の日本刀を構え

シユンシユンシユンシユンシユンシユン

次々と突撃してくる黒鳥を片っ端から切り落とし始めたのだ。
屋根の上にガラガラと黒鳥の肉片が落下し、コロコロと転がっていき

く。
瓦と肉のぶつかる音は意外と軽快な音なんだな と、加羅は薄ら感じ

る。
無双を繰り広げる長身男の横では、冷静に弓矢を構える栗色髪の少年

放った火矢は見事に四本目の油矢の近くへ突き刺さった。

二本の矢から噴出した炎は激しく燃え上がり、近くでウロウロしていたヒヨコもどきを焼き殺す。

ギヤーギヤーと鳴き喚くヒヨコもどきは、次々に炎によってドロドロと溶かされてしまった。

「・・・すっげエ・・・」

目の前で起こっている現実を、半ば夢心地で見つめる加羅。

屋根の上で二刀流を披露していた長身男は、最後の黒鳥の首を切断すると、バツと刀についた血を拭き払う。

そんな男を静かに見つめる人間鳥。

長身男も鋭い視線で人間鳥を睨み返す。

なんだか場違いな気もする加羅。

そーっと場所を移動する。

長身男は、隣でハーッと息を吐く栗色髪の少年へ話しかけているようだ。

黒い羽織を軽く振ると、袖から一枚の紙が出てくる。

その紙と、人間鳥を見比べている のだろうか。

「アイツが今回の親玉ですかね」

「・・・そうみてエだな」

紙には墨で人間鳥の絵。真ん中には達筆な文字で『酉』。

『始まりの部屋』にて、加羅達が見た絵と全く同じものであった。

人間鳥の長い長い黒髪が、風に吹かれてゆらゆら揺れている。

持っている槍の先端が、キラリと月の逆光で輝いた。

一方その頃、武藤猛（武士男）率いる月夜、陽夢、岬、上野元太（デブ男）は渡り廊下をズンズン進んでいた。

庭には黒鳥が大量に旋回しており、横切るのは危険だと判断しての行動だ。

まだ、屋根のある渡り廊下の方が安全なのだろう。

地面で倒れた人間を啄んでいた黒鳥数匹と月夜の目が合う。

一瞬ドキリとするも、黒鳥たちはスグに視線を逸らし 一心で死体を突きつけていた。

倒れた男の着服が血に染まり、お洒落な青いジャケットを台無しにしている。

まあ、もうこの男には必要ない服なのだろうが。

「質問なんですけど、おっさんいいですかッ!？」

「おっさんじゃ無くて 武藤さん って呼んでくれよッ!」

走りながら陽夢が猛へと呼びかける。

陽夢もそうなのだが、初めて身に着けた巫女服は非常に走りづらい。小さいサイズしかタンスに入っていないため、体には少しキツイほどフィットしている。かさ張らないのが唯一の救いか。

「つまりゲームに勝つには『親玉』を倒せばいいんですね!？」

「そうしたら人を食う鳥とか、そんなんが全部消えるんですね!？」

「ああ、そうだお嬢ちゃん」

「アンタらが目覚めた部屋、『始まりの部屋』で仏像から絵を配られたろ?」

「お嬢ちゃんじゃなくて陽夢な!太陽の夢で陽夢!」

「そこに描いてあった奴が『親玉』だ」

「でも、いくら装備してるからって油断すんなよ」

「結構モロいからな、その服(巫女装束)」

「は、はあ!?! 話が違うじゃない!」

岬が猛へ野次を飛ばす。

月夜も声には出さないが、内心驚いていた。てっきり無敵の服なのかとばかり思っていたからだ。

「まあ落ち着け 焦っても何も状況は変わらんさ」

「このまま他の奴らと合流」

「ど、どうしたのよ 前に何か」

「止まれッ!!!」

猛が叫び、場の全員を制した。

ビクリと体を反応させ、岬と月夜が足を止めた。陽夢も舌打ちを交えつつ足を止める。

だが、元太は え、なにに？ などと緊張感の無い事を言いながら、ゆっくりと足を止めていた。

この人は自分の置かれた状況を理解しているのか？ と月夜は疑問に思う。

猛の睨む先、渡り廊下の奥。

月夜も真似して目を凝らしてみる。暗闇にも関わらず、闇の奥は鮮明に確認できた。

闇の中で佇むのは、孔雀。

月夜よりも一回り大きなガタイをした、大きな孔雀だ。羽は閉じている。

「え、あいつも化け物なの」

「おっさ 武藤さん!？」

陽夢が言葉を言い終わらぬうちに、猛は日本刀を片手に孔雀へと直線的に突っ込んでいった。

日本刀の刃を孔雀方向へ向け、上段の構えへ持っていく。左足を持ち上げ、一気に踏み込むと同時に切り込んだ。

「あッ！」

思わず声の出る月夜。

猛の振り下ろした日本刀は地面と垂直に振り抜かれ、孔雀の脳天を真っ二つに切り裂いたのだ。

遠目でもわかる、孔雀の脳みそが床へ飛び散った様子を、鮮明に。

「ひ、ひどい」

岬が悲痛の声をあげた。

確かに、月夜も陽夢も全然良い気分にはなれない。だが、仕方ないのか。

殺さなければ、殺されるのだから。

「……んあ？」

クエエエエエ　クエエエエエエエエ

元々細い頭と首を二分割された孔雀は、湧き出る鮮血と共にサイレンのような甲高い音を発生させた。一体どこから声を出しているんだ。

「何だコイツ」

「ッ！！　つな！あぶねエ！！」

大きく振り払った孔雀の羽が、咄嗟に背後へ飛んだ猛の紋付羽織をかすった。
羽と接触した黒い羽織は、次の瞬間には孔雀の頭同様パツクリと割れてしまう。

黒鳥の口ばしを弾いた服とは思えない。

「こんの野郎お・・・」

更に刀を二度、三度孔雀へと叩き込む。
だが、体へと叩き込んだ刀からは、孔雀の肉を引き裂いた感覚は伝わってこない。

孔雀の振り抜いた羽をしゃがみ避けし、刀を突き刺してみるも、固いゴツゴツした物体が阻害して貫けない。

「ど、どうしようお姉ちゃん」

「私たちも戦った方がいいのかな・・・？」

「・・・陽夢はここで待ってて」

「私が行くから」

「何言ってるの月夜ちゃん!? 危険よ!」

「そ、そうだよお姉ちゃん!」

「お姉ちゃんが戦うなら私も行くよ!」

「でも、危ないから・・・」

「危ないのは皆一緒でしょ!」

「月夜ちゃんだけに危険を押し付けないよ、私は!」

「あ あの・・後ろ」

激論する女性陣の中、唯一口を開いていない元太が、遠慮深く声を出した。

岬が振り返った場所、背後の渡り廊下には何も無い。

っと思つたのも束の間、足元でチョココンと自分を見上げる鳥に気付く。

「あ」

「・・・ニワトリ？」

岬の足元には一匹のニワトリ。

真つ赤な目を物欲しそうに岬へと向け、血小さな声でクルックーと喉を鳴らした。

危険を察知し、すぐにニワトリから距離をとる月夜と陽夢。

背後では頭を失った孔雀と猛の激しい攻防戦が聞こえる。

「何してるの篠原さん！」

「早くソイツから離れて！！」

「え、でも・・・え」

「ただのニワトリだし」

「早く！！ 篠原さん！！」

陽夢の必死な警告を振り切り、ニワトリへ両手を差し伸べる岬。

そのまま抱きしめ、立ち上がる。

月夜は何となく嫌な予感がした。

「ほら、陽夢ちゃん アナタも近くで見てごらん」

「この子は大人しいみたいよ？」

「ほら、ほら」

「やめて篠原さん！」

「早くそのニワトリを離して!!」

「陽夢、下がって!!」

「篠原さん! どうしちゃったんですか!？」

「え、別に何も・・・どうしたのって・・・」

「そんなに私おかしい？」

寂しそうに月夜と陽夢を交互に見比べる岬。

つが、視線がうつろだ。

時折、力を失ったようにグルンと眼球が明後日の方向を向いていた。

篠原さんの様子がおかしい・・・!

クルツクー クルツクー

「篠原さん! そのニワトリを捨てて!!」

突如、一際大きな声で鳴きだしたニワトリ。

この時、元太だけは気付いていた。

岬の背中に、巫女装束の丁度 袴の上部分に、白い羽が突き刺さっていることを。

先ほど音も無く岬に近づいたニワトリが、自分の口から吐き出した汚い羽だ。

「あ、あの・・・ その人の背中に」

パアアアン

一瞬、ニワトリの体が膨れ上がり、破裂した。

まるで風船が割れるかのような、そんな軽い音。

ポトポトと破裂したニワトリの部品が渡り廊下へと散らばった。

その中に交じって、ニワトリと密接していた篠原岬の首も

「いやあああああ！　しのは　篠原さあああああん！！」

陽夢の喉の奥から絞り出された絶叫虚しく、頭を失った岬の体はク
の時に折れ曲がる。

そのまま正座の姿勢へと移行し、それきり動かない。

首の無い巫女姿での正座。　ショッキングを超えた映像だ。

「篠原さん！篠原さあん！　いやああああああ！！」

「何してるんだ！！」

つと、孔雀と戦闘を繰り広げていた猛が踵を返して戻ってきた。

顔には大粒の汗を浮かべ、ゼエゼエと肩で息をしている。

長い前髪はペツタリと額や両目に付着。

不死鳥のように襲い掛かる孔雀に苦戦したのだろう。

現に、背後では体をボロボロにされた孔雀がヨロヨロと接近してく
る。

「手を貸せ！」

「え」

放心状態の月夜と陽夢の手をとり、ブンっと力強く振らせる猛。振った腕の巫女装束、その袖が宙で弧を描き、中から飛び出したもの。

一本の日本刀であった。猛が振り回していたタイプと、全く同じ。

二人分の日本刀がガラランガラんっと廊下に落下した。

「いいか！ ついてこいと言ったが、助けるとは一言も言っていない！！」

「自分の身は自分で守るんだよ！ 甘えるな！！」

拾った日本刀を半場、強制的に二人の胸へ押しつける猛。

受け取った日本刀は、ズッシリとした重量に質感のある鞘。間違いなく本物だ。

「つてか、こんなのが私の袖の中に入ったの！？」

「あの孔雀は倒せようになエ 道を変えて仲間と合流すんぞ」

「渡り廊下を出て庭を突っ切る！ ついてこい！！」

つとと言うやすぐに、猛は廊下の手すりを飛び越え、小石の詰められた庭へと飛び降りた。

一瞬チラリ月夜達へ目を動かすも、スグにかなりのスピードで走り去ってしまう。

あの男は本気だ。

油断すれば置いて行かれる。簡単に。

「何なのよ……もう……」

助かると思っていたのか、陽夢はひどく落胆していた。それに、岬の死が衝撃的過ぎたのだらう。出会って間もないとはいえ、彼女は岬と仲良くし過ぎた。

「行くよ、陽夢」

「泣いても・・・篠原さんは戻って・・・こないんだから・・・」

背後の岬を見る月夜。

つが、スグに前を向き、手すりへと足をかける。

陽夢も決心したのか、岬との決別する決断を下したのか、その後を追う。

猛の事は気にくわないが、戦力から離れたら間違いなく自分と陽夢は死ぬ。

それだけは阻止しなくては。

「待ってくださいよお」

元太は、二人と同じように袖を振って取り出した日本刀を握りしめ、後を追う。

すぐ近くまで接近していた孔雀は、獲物を失い、ゆっくりと元いた場所へと歩いて行く。

そのうちに、姿は暗闇へと消えてしまった。

この時、金田信三（大阪中年）は、『始まりの部屋』で壁に寄りかかっていた。

脇腹を抑え、呼吸を荒くしている。

頭はジンジン熱くなり、脂汗が大量に頬を伝う。

瓦礫と化した障子や木片を自分の体へと乗せて、鳥から姿を隠しているのだ。

「…………ア…………カッハ…………」

必死に息を殺す信三。

そんな彼の目と鼻の先、ミニブツの置かれている仏壇。あつた場所と変わらない位置で微笑むミニブツ。

ミニブツの周りで燃えているロウソクの本数は7本。

既に火が消えたロウソクは11本。

つと、風が吹いたわけでもない。地震が起きたわけでもない。

突然、端の一本が消えてしまった。

まるで、力尽きた、燃え尽きたように……

ゴーン

ミニブツから発せられた低い鐘の音。

この音に信三は気付かなかった。

気付く余裕などなかった。

新キャラ説明

16、栗色髪の少年 「三村翔太」生存 『右庭』

17、長身の男 「飛田義文」生存 『右庭』

妖怪図鑑

【黒鳥】 口ばしを鋭く構え、人間を貫き捕食する

【ヒヨコ】 体から物体を溶かす毒ガスを発生させる

【孔雀】 単体で害はないものの、大声によって他の鳥を呼び寄せる

【ニワトリ】 羽で刺した者の思考を麻痺させる。身に危険が迫ると自爆

参 【甘えるな】（後書き）

お疲れ様でしたー

『マークをつけると、ちょっと可愛い文章になりますね
気付いちゃったんですが、キャラの名前が覚えにくいですね
そのうち改善していこうかな？
時間と暇と金と彼女があれば改善します。
あ、一生改善しないですね。

それでは、次回お会いしましょう！
バイバーイ！

四 【西】（前書き）

最近ジヨギングがマイブーム。

夜遅くに人通りのない街を疾走・・・気持ちイ・・・。

そんな僕は結構大食い。

特に昼食なんかはガッツガッツ食べます。

さつき何気なしに体重計乗ったら面白い事になっていた。

面白すぎて笑えない。解せぬ。

今話は新キャラによるバトル。

結構前に書いた文章なので、全体的に酷いです。

軽い黒歴史だよチキショー・・・

四【西】

左庭

「刀に持ち変える三村ア！」

屋敷、瓦屋根の上で二刀流の構えをする飛田義文（長身の男）。その横で弓矢を投げ捨てた三村翔太（栗色髪の少年）は、ブンと腕を一振り。紋付羽織の袖からは一本の日本刀が姿を現した。空中でキャッチする。

「来るぞー!!」

翼を地面と平行に寝かせた鳥人間が槍を義文、翔太の方へと構え、ギロリと一睨み。

次の瞬間には風を切って超スピードでの飛行を開始した。

全身の漆黒模様布が風になびき、さながらカラスのような姿を全員に魅せつけている。

風圧により、長い長い髪の毛が背後へと廻り、黒い尻尾に見えなくもない。つと、厠の陰で戦況を見守る新藤加羅は、ぼんやりと考えていた。

鳥人間が最初に狙ったのは長身の義文。

構えた槍の先端は、的確に義文の頭へ。鳥人間の身長より長い槍は余裕で義文の額を打ち抜く。事はなく、空振り。スレスレで義文が顔を右へズラしたのだ。

その時、すでに義文の刀を握った右手は天高く持ち上がっており、挟み込むように刀を突きだした翔太と視線を通わせる。今だ！っと言わんばかりに同時に刀を振り下ろした二人。

「ぬおツ！？」

「あっ！！！」

っが、咄嗟に上空へ飛び去った鳥人間。

突如ターゲットを失った二人の刀は勢いを殺さず、お互いの体へ先端を突きかけてしまう。

だが自滅することはない。

寸での所で二本の刀は止まった。

目でアハハッと笑いかける翔太を一瞥し、上空を見上げる義文。すぐ目の前にはキラリと光る銀の槍が

「
っちイ」

義文の頬に鋭い衝撃。

鳥人間が垂直に放ってきた槍は義文の顔ミリ単位横を通過。皮膚を薄く削り取る。

ププツと鮮血が舞うが、気にしてられない。

両の手で構えた二本の刀で、たった今目の前を通過した槍を挟み込む。

槍を中心に交差し、さながらハサミのようにチョッキンと

パキイン

鳥人間の目が大きく開かれた。

持っていた自慢の槍が、いとも簡単に二つに分割されたからだ。

咄嗟の事に反応しきれない鳥人間の目は、二本の刀を突き出した義文へと集中している。
その背後で刀を振りかざす翔太に全く気付いていない様子。
義文は鳥人間に視線を送った。

ザ・マ・ミ・ロ

「あああ!!」

翔太の掛け声と同時に、義文の目の前で大量の血が宙を舞った。
逆さまの鳥人間の脇腹から肩にかけて現れた一筋の光。
血にまみれた日本刀が、鳥人間の左半身を削り取る。

「ッ!? つがアア!」

つと、その時。

鳥人間の黒い血が、義文の両目へと入り込んでしまう。
脱力した鳥人間が寄りかかるように義文へと倒れ 視覚を失い、
それを避けられない義文はモロに体を重ね合わせてしまった。
バランスを失った義文と鳥人間はガラガラと瓦屋根を転がり、当然ながら

「飛田さん!!」

翔太の叫び虚しく、一人と一匹は落下した。
地上、10メートルは超えるであろう屋根から落下した。
スグに落ちた場所へと顔を覗き込ませる翔太。

つが、一安心。

落下したのは池の中央であった。

水の波紋が広がる池には、鳥人間が手足を投げ出した状態でプカプカ浮き　バシャーンとひっくり返った。鳥人間をどかし、水の下から全身の紋付羽織袴をずぶ濡れにした義文が起き上がったのだ。

二本の刀は手から消えており、代わりに素手になった右手を　瓦屋根から覗き込む翔太へ向け

「ミッション完了だ」

親指をグツと突き立てた。

「やりましたね、飛田さん！」

「今、僕もおります」

つと翔太が叫ぶと、何の躊躇いもなく全身を投げ出す。

翔太の履いた草鞋が足元でキュッと締まる　つと、当たり前のように翔太は地面へと着地。

池のすぐ横に着地した翔太は、ずぶ濡れの義文と目を合わせ、ニッコリ。

「この調子で倒せば、意外とスグに終わっちゃうかもですね」

「【戌】にしる、【酉】にしる、飛田さんと武藤さんが居てくれれば楽勝ですよ！」

「当たり前エーよ」

「つてか、武藤はどこ行つたんだ？　あのお人よしが」

「どこで参加者と合流できたんだか」

「さ、さあ」

「今回の参加者、人数が多かったみたいですし」

「引率に手間取ってるのかも」

「はアゝ・・・ったく」

「面倒見てる暇あったらコツチを手伝えつての」

「まあまあ、飛田さん」

「・・・そういえばさつき、参加者、かな？　が1人厠に隠れてましたよ」

「戦力になるかはともかく、ほっとく訳にも」

「ああ、そっか」

「んじゃあ、確保しに」「行、グツ」　「あ？」

義文の首がとんだ。弧を描いて、地面をコロコロと。

コロコロコロコロ転がった首は、翔太と反対の向きを見据えてやっ
と止まる。

翔太の目の前には、頭を失った大きな体が一つだけ。

倒れる事もなく、ただただズンつと二本の足で立っている。

「　　」
「　　」

声すらあげられない翔太。

つと、目の前の体が横へ大きく薙ぎ払われた。

まるで発泡スチロールのように軽々と屋敷の壁へ激突し、四散した。
比喻表現抜きで、文字通り、義文の体は碎け、四散したのだ。

そんな、茫然とする翔太の目の前で大きな真つ黒い翼を左右に広げ
る鳥。

身長168？の翔太を4回りほど上回り、鷹の目で睨みつけてくる。
全身を真つ黒な毛で覆われ、真つ黒な大きな顔を兼ね備え、どこも

かしこも真つ黒な大きすぎる鳥。

これこそが、【酉】の真の姿であった。

翔太は八つと意識を取り戻し、自分が日本刀を持っていない事にも気付いた。

屋根の上に置いてきたのだ。最悪だ。

ブンつと腕を一振り、刀を取り出すのが、構える事は無かった。

「ッグホ！」

巨大鳥の振り払った翼が、翔太の細い体を強打。背後の木へと、全身打撲する事となった。

涙目になる翔太だったが、すぐにその場から離れるために、横へ転がる。

つと、次の瞬間には、巨大鳥の鋭い口ばしが背後の木をえぐり取ったのだ。

ひい つと悲鳴をあげた翔太を、巨大鳥の鋭い視線が貫く。

「あああああああ！！！」

すっかり取り乱した翔太は、咄嗟に両手を巨大鳥へと向けた。

揺れた紋付羽織の袖から、シュンつと数本の鋭利なクナイが飛び出す。

巨大鳥へ直線的に飛んでいったクナイは、見事に全発命中。巨大鳥が悲痛の声をあげた。

「うわあああああ！！！」

「あああああああ！！！」

ブンブンっと手を振り、両袖からクナイを飛ばす翔太。形振り構ってはいられない。とにかく刺すしかない。次々と巨大鳥の体に命中するクナイ。巨大鳥の声が、さらに一層甲高く夜空へと響き渡る。

「おいアンタ!!」

「危ねエぞ!!後ろ!後ろ!」

厠で半身だけ覗かせていた加羅が叫ぶ。

翔太は咄嗟に背後を振り返った。つが、誰もいない。

足元のニワトリにまで、意識が回らなかった。

パアン パアン

「ぎゃああ!!」

翔太の右足は、二匹のニワトリの自爆によって 体から切り離される形となった。

ポトポト足の断面から筋肉が零れ落ちる。

つと同時に、片足を失った体は必然的に地へと這いつくばる。

地面にドサリと倒れ込んだ翔太は、痛みと恐怖に唇をかみしめた。

殺される・・・? 死ぬ・・・のか・・・?

「うおおおおお!!」

つと、加羅が刀を振り上げて、巨大鳥の背後に迫っていた。

先ほど、義文が池の中に落とした日本刀の片割れだ。

その鋭い日本刀は、地面へ真っ直ぐ巨大鳥の体内を切り裂いた。ズシヤリと片羽が地面に落ちる。

キツシャアアアアアアア

「うおおッ!!」

巨大鳥の残った方羽が、しゃがんだ加羅の頭上を通過した。

その時に、羽に触れてしまった刀が弾き飛ばされ、カランカランつと遙か背後で虚しい音を出す。

ギョロリと目玉が加羅をその場に縫い付けた。

「ひいッ・・・」

「だらっしゃああ!!」

さらに残った羽を、背後からの奇襲によって切り離したのは、武藤猛。

庭を突っ切ってきた猛は、いち早く翔太たちと合流できたのだ。

さらには、背後から巫女装束で身を包んだ月夜、陽夢、紋付羽織袴を装備した元太の姿が。

啞然としたのも束の間、足元で息を荒げていた翔太の両肩を持ち、巨大鳥の元から離れる。

「ぬあああ!!」

もうひと押しつと言わんばかりに、猛は巨大鳥の顔へと直接日本刀を打ち込んだ。

つが、ガツンと固い衝撃。

何だ！？つと焦った猛の日本刀は、巨大鳥の口ばしで受け止められていた。

エサのように挟み込み、次の瞬間にはガキイン　粉砕してしまっ
た。

「武藤さん！！」

「黙ってる！！」

月夜の叫びをかき消し、直接巨大鳥の首へと両腕を巻きつける。
体を飛び乗らせ、背中へ回り込み、背後から落としにかかる猛。形
相は必死そのものだ。

焦っているのか、両腕の傷口から大量の黒血を撒き散らす巨大鳥。
つと、次の瞬間

「あッ！！」

巨大鳥が宙を舞った。

羽が無いはずなのに、つと陽夢が叫ぶが、月夜は気付いたようだ。
巨大鳥の背中、両肩の後ろあたりから超再生で二本の羽を生やして
いたのだ。

最初からついていたんだけど、折り畳んでいただけ？

いや、そんな事　今は関係ない！

「あ、お姉ちゃん！　どこ行くのッ!？」

月夜は走り出す。巨大鳥が猛に集中している、今がチャンスなんだ。
アイツを倒せるのは、私しかない。

袖を振り、弓と矢を取り出す月夜。

来る途中に、猛が武器の取り出し方を早口で教えてくれていた。

出したい武器を頭で祈れ。袖を振れば取り出せる。

空を見渡せる、広い庭のど真ん中へと駆け寄る月夜。

遙か上空では、巨大鳥と猛がゼロ距離で決死の攻防中だ。

首の柔らかい巨大鳥は、背後で抱きつく猛の頭へ口ばしを伸ばし、猛がギリで避け、口ばしを伸ばし　　の繰り返し。

だが、遅かれ早かれ猛は食べられる。

そうならば次は自分、もしくは陽夢の番だ。

「っふうっ……」

以前、弓道部の友人が大会で弓を放つ姿を見ている。

思い出して……確か……二指で矢の尻尾をつまんで……

キリキリ……っと、矢をかけた弓が曲がり始めた。

フォームだけは完璧だ。

霧島月夜は、実に吸収の速い高校生。こんな事は朝飯前なのだろう。

「あっ!!」

陽夢が声をあげる。

上空の猛がバランスを崩し、宙へ放り出されたのだ。

しかも、地へ落ちる事はなく、猛の体はガシッと　　巨大鳥の両足でキャッチされた。

胴を掴まれた猛は、手足を必死にジタバタ暴れさせている。

っが、取り外せるはずもない。

「もう……ダメだ……」

元太は呟き、隣の陽夢をチラリ。
数十メートル先で、弓矢を構える月夜を確認。 あんなの、当たるハズがないよ・・・
腰を抜かして地面へ座り込む加羅に、足元で虫の息の翔太。
そして、空中では今まさに捕食されようとしている猛。

死ぬくらいだったら・・・

「きゃあ！」

元太が陽夢を突き倒した。

抵抗する間もなく、ほぼ無抵抗で転がされた陽夢の体へ馬乗りになる。

ぜえぜえつと鼻息が荒く、汗がボタボタ陽夢の顔へと零れ落ち胸元へと手をかけた。

苦しんで・・・死ぬくらいだったら・・・

「きゃあああ！！！」

陽夢の胸元を両手でバツと開く。

ポロリとそびえ立つ発達途中の胸。

秘部を覆い隠す黒い下着が、元太をさらに興奮させる。見る見るうちに瞳孔が開き、鼻水まで垂らす始末。

「いや・・・離してえ！！！」

「いやああ！！！」

陽夢は必死に暴れるも、倍はある大男を退かせるハズもない。

肩から完全に白衣を剥かれ、上半身が下着以外赤裸々にむき出しにされてしまった。

「死ぬくらいだったら・・・ハアハア・・・」

「一回ぐらい・・・ハア・・・僕にも・・・ツハアツカハア」

「いや、いや・・・いやあああ」

「やめなさっ やめ、やめてえ！」

そんな事に気付いていない月夜は、視野を狭くして上空の鳥を見つめていた。

恐らく、外せば巨大鳥に気付かれるだろう。

勝負は一発だ。

そう、スキがあれば・・・あの鳥が油断する一瞬を狙って・・・

妖怪図鑑

【酉】 普段は、全身を黒づくめの布で覆った女性に変身している妖怪。十二支妖怪の一人。

本当の姿はバカデカいカラス。

何でも貫く口ばしで獲物を捕らえ、捕食する。

残り
1
8
人
1
4
人
7
人
6
人
6
人
+

四【西】（後書き）

お疲れ様でしたー。

ここまで読めば気付くでしょうが、キャラがバンツバン死ぬ小説です。

アナタの意外性を狙った作品になってくるハズですので、
どンドン続きを読んでください。

それでは次話でお会いしましょう！

バイバーイ 誰か良いダイエット方法教えてエー（泣

五 【エクセレントじゃ】（前書き）

慌てん坊のサンタクロースって歌ありますよね。

作中で彼は愛されキャラに描かれているようですが、果してどうだろう。

え、だって男でしょ？

コイツ男（野郎）なんでしょ？

ムツサイ男が赤い服着て「来る時期ミスったおw」って謝罪会見を開くんでしょ？

一発殴ってから話を聞きたいですよ、僕は。

逆に女サンタなら大歓迎。

ミニスカでブーツとか履いちゃって・・・

な、なにをプレゼントしてくれるんだろう・・・

っと、最近の妄想壁がヒドイ作者でした。

五 【エクセレントじゃ】

「離せ！離しやがれエエエエー！」

自分の体に巻きついた巨大鳥の足へと拳を打ち込む武藤猛だったが、一向に離す予兆が見られない。

それどころか、どんどんキツくなっているのか。

証拠に、足の爪が猛の背中へとブシュリ 深く食い込んだ。これまで体験したことのない激痛が猛の背筋を凍らせる。

「……ッ」

闇夜に響く猛の悲痛な叫びに、顔をしかめる霧島月夜。狙うのだ。巨大鳥のスキを。焦らずに。

巨大鳥の鋭利な口ばしが猛の頭へ高速ダイブ。

つが、寸での所でそれを紋付羽織の袖でガード。

口ばしを右手でしっかり受け止めた。

自慢の口ばしを封じられ、焦りからか暴れだす巨大鳥。

これでは月夜の狙撃が上手くないかない。

鳥が大人しくなるのは、とある一時だけ。

その時が来るのをジッと待つ。

「つくぬつううう……ッ！ うわアッ」

口ばしから飛び出した舌で、手を払われてしまった猛。

必死に地上の月夜へと目線を送る。早く撃て、と。

なんで撃たねエんだ 早くしないと・・・体力も装備も・・・ツ
・・・ツ!? まさか、アイツ

「まさかお前ツ！ 俺を見捨てる気なのかッ!？」

鳥が気を抜く事は滅多にない。

旋回している時ならば尚更だ。それに、今は足元でエサを掴んでいる。

そんな、エサを前にした時の鳥が行動する瞬間。息を抜く瞬間。猛は気付いてしまった。

月夜の目論みに。

「俺が食われるまで待つ気なのかよ!!！」

「おいッ！ おいイ!!！」

そう。鳥が油断する時とは、 エサを啄んでいる時 だけだ。
そのエサとは、猛本人。

大声で月夜へと言葉を飛ばすが、返事は帰ってこない。
ただただ、無言で弓矢を猛の方へと構えていた。

ふざけるなよ!？

「ちつきしよオ！ ちきしよオ!!！」 「アガッ!！」

猛の腹へ深々と突き刺さったのは、巨大鳥の口ばし。
意識を月夜に向けていたため、油断していたのだ。

コポコポと溢れる血と泡。

巨大鳥が身震いをし、猛は自分の血が吸い取られるのを感じた。

コイツ、俺の血を・・・

「があああ！ 早くッ、撃つてくれエエエエ！」

アナタ言ったわよね。『自分の身は自分で守れ』『甘えるな』って。

月夜の握る矢へ一段と力が込められ 音がミシミシと・・・。

私は人の揚げ足をとる趣味な無いけれど、赤の他人を助けるお人好しでもないの。
ごめんなさい。

人差し指の力を抜いたと同時に、ヒュンツ っと矢が真っ直ぐ巨大鳥へと放たれた。

猛の眼前へと矢じりが一杯に広がる。
ツと同時に、巨大鳥が飛んでくる矢に気付いたようだ。
何をするのか、口ばしをガパアっと開きかけ

でもね、武藤さん

開いた口ばしに、矢が深々と突き刺さった。喉を突き抜ける。
キシヤアアアアアアア

部屋で鳥に襲われた時、アナタは確かに私や陽夢を助けてくれたわ・・・。
その時の借りは返さないかね。人として。

獲物を仕留めたと勘違いした巨大鳥は、その大きな自慢の口ばしへと矢を突き立て 落下。
足にはしっかりと猛を捕獲したままで、だ。

このまま落ちれば、落下の衝撃と鳥の重量で助かる事は無いだろう。だから、月夜は走る。鳥の落下地点へと。

両目を閉じた巨大鳥は、重力のなすがまま地上へ。

鳥と地面の間でグツタリと脱力している猛へと月夜が飛び込む。

身に着けていた巫女装束からキュイイイン　　と音が。だが気にしてられない。

スライディングの要領で、キャッチャーがフライのボールをキャッチするみたいに　　。

猛の肩をがっちり握り、体を自分の上へと乗せた。この時すでに、鳥と地面の間は一メートル程度。

ズドオオオオン　　と、次の瞬間には落下しきった。

「だ、大丈夫ですか！？　武藤さん！？」

「カ・・・カハツ・・・！」

口と背中から血を散らす猛を地面へ。

どう応急処置しようかと必死に頭を回転させるも、包帯すらないこの状況。どうしようもない。

そうだ！屋敷の中なら何か置いてあるかもツ・・・

「おいデブツ！　テメエ何してんだ！！」

　　と、屋敷へ向かおうとした月夜の耳に入る声。

新藤加羅の声によって、やっと月夜は陽夢の危機を察知した。

すぐ向こうでは、半裸に剥かれた陽夢。そこに馬乗りになっている上野元太。

その背中に声を荒げた加羅が抱きついていて、どうやら陽夢から引き離そうと奮闘しているようだ。

「離せよオオ！」

元太が加羅をドンツ　と突き飛ばす

紋付羽織袴によって派手に転がった加羅。数メートルほど前転と後天を混ぜたようなフォームで体中を砂埃に。

加害者の元太はイソイソと陽夢の朱袴へ手を伸ばし　。
必死に抵抗し、足蹴りを元太の腹へと打ち込んだ陽夢の顔に、ビンタが一発とんだ。

頭に血が上った元太の仕業だ。フーフーと鼻息が非常に荒い。

陽夢に何て事してるの？

わけの分からない叫びを披露する元太を見て、月夜の中で何かが弾けた。

裾を振り、取り出した日本刀を握り　早歩きで元太の元へ。

陽夢を守れるのは私だけ。

「ぶひツ！ぶひひひひイWWW」　ゴスツ　元太の背中に大きな石がヒット。

殴ったのは加羅。落ちていた置き石を担いできたのだ。
さらに持ち上げ、元太の背中へもう一発ゴスツ　。

「テメエ！離してやれよ！！！」

「うつさい!!」

二発、三発　元太がクルリと振り返る。

眉毛にシワの寄った顔。右手拳を握りしめ、背後へセット。狙いは加羅の顔面。

次の瞬間には、パンツ　と軽い音が響き、加羅の顔面を跳ね飛ばした。

通常の元太よりもパワーアップした一撃。

装備無しの加羅には丸太を打ち込まれたも同然なのだ。

プツと鼻血を出した加羅の顔はグルリ　180度回転。
ドサリと体が倒れる。

「ぼぼつぼ、僕の邪魔をするなよお!」

「お前が　お前が悪いんだぞアアア!？」

「あゝあゝアアアア!!」

月夜の掛け声と共に、雄叫びをあげる元太の体へ日本刀が。

ガキイン　つと不可解な音と共に、元太の紋付羽織が日本刀を弾く。

弾かれ、尻餅をついた月夜の目の前で、元太は更に更に獣のような雄叫びを叫びだした。

元太も限界だったのだろう。その行動に人間らしさが見られない。

「邪魔するならお前も俺のモノに」「ぶひゃッ!？」

つが、元太の顔にクリーンヒットした孔雀の顔。

さきほど、月夜達と遭遇した孔雀 ではない。なぜなら、頭は猛が真つ二つに割ったハズだからだ。だが、目の前の孔雀は顔面に傷無し。別の孔雀なのだろうか っ、今は置いてッ！

元太の背後には、一人の男。孔雀の頭を投げた男。咳くように一言。

「喧嘩両成敗ってねエ・・・」

「だ、誰」 「だッ!!」

暗闇からゆらりと現れた男が、ザシュツ っ、元太の頭を宙へと飛ばす。

その手には日本刀。体には紋付羽織袴。居合の要領で刀を振り切った男は、ヌボーっと立ち尽くす元太の体を端へと蹴り退けた。

すでに元太の頭はどこか闇の中だ。

「え」

月夜は思わず声をあげる。

男の見た目は五〇前後だろうか。白髪交じりの髪の下、額には深いシワ。

垂れ目に垂れ眉毛、無精ひげに端の吊り上った口元。なんだか、とても好感の持てなさそうな雰囲気。

男は、ヒヒヒツ・・・と小さく笑う。

月夜の背筋がゾツと凍った。何でかは知らないが、体が受け付けな

いのだ。この妖しい男を。

「おい、嬢ちゃん」

「は、はい？」

声が上がらず。

「さつきからお前さんの腕を見させてもらったが、中々のもんじゃねエの」

「そこで転がってる翔太や、死んじまった義文よりも良いモン持つてるぜ」

「え、……えエ……」

「ただな嬢ちゃん。一つ覚えとけ」

月夜の背後でうごめく影。

左右に背中中の翼を広げた巨大鳥が、矢の刺さった口ばしをクパァ……と開帳。

痙攣していた猛の腹を踏みつけ、骨や内臓の碎ける鈍い音が月夜の耳へと届いた。

ハツと後ろを振り返る。

つと、目の前には、巨大鳥と妖しい男。

あれ？ 今、私の前に居たのに

「覚えとけ嬢ちゃん」

妖しい男は腰元の刀に手をかけ、ヒッヒッヒ……と小笑い。

「ここじゃあ遠慮した奴から死ぬんだ・・・」

「状況を受け入れな。」

「アンタは俺と同じ匂いがする」

シャキンッ　　と、巨大鳥の喉前で一筋の光が弧を描いた。

妖しい男の振り抜いた刀は、一瞬で元の鞘へと納められる。

次の瞬間、巨大鳥の頭は地面へと重々しく落下。

噴水の如く、真っ黒な血を空へと放つ。

「ま、そんな所よ」

キユイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイ
イイイイイイイイイイ

「きゃあッ!?! 何!?!」

突如、強い光に包まれる月夜。
スグに意識は途切れた。

『酉討完了』

「はッ!?!」

月夜は意識を取り戻す。

彼女はスグに周りを確認。　　と、隣には月夜同様、慌てて周囲を見渡す陽夢の姿が。

お互いに顔を合わせ、ワツと無言で抱きつく。
良かった・・・本当に助かってよかった・・・

陽夢の匂いが懐かしく感じられる。

こんなに陽夢の体は柔らかかったか。安心感が月夜を心一杯に襲った。

「感動の再開の中悪イですが、大人しくしてくれるかい？」

「ワツ！」

二人だけではなかった。

気付けば、月夜の隣には妖しい男に、その隣に三村翔太。
陽夢の隣には大阪中年。

しかも、よく見れば部屋も違う。

畳が敷き詰められ、天井には蛍光灯。

周囲も障子と襖しかない和風の部屋なのだが、違いが二つ。

一つは広さだ。

最初に目覚めた場所よりも格段に広い。

教室二つ分ところか、体育館くらいはある広さじゃないだろうか。

続いて二つ。

目の前にあったミニブツの代わりに、大きく広い台の上にズラーリ

っと並べられた写真。

花が飾られており、台は黒と白を主色としている。

そうまるで　　葬式を連想させるような。

「ご察し通り、葬式だけ？」

「・・・ッ！」

妖しい男は紋付羽織袴で身を包み、翔太、金田信三（大阪中年）もまたしかり。

陽夢と自分は巫女装束のまま。

つまり、巨大鳥を倒した状態そのまままで連れてこられた？

『エクセレントじゃ！エクセレントじゃ！』

「わッ!？」

突如、部屋の中に声が響き渡った。

どこかで聞いた事ある声　『始まりの部屋』でミニブツから発せられた声だ。

シドロモドロする月夜と陽夢、信三の様子をニヤニヤ楽しそうに眺める男。

翔太は静かに足元の畳を凝視。

グツと膝に置いてある拳を握りしめた。

『【酉】の討伐お疲れ様です』

『また次回に』

ゴォーン

鐘の音が響き渡り、無音の状態が場を支配した。

スツと立ちあがった男は、大きな欠伸を1つ。

首をポキポキと鳴らしながら部屋を後にしようと、襖に手をかける。

月夜は即座に立ち上がり 待つて!と男に一声。
首だけを月夜へと向ける男。
垂れた目から剥けた眼球がギョロリ。

「なあんだ嬢ちゃん？」

「・・・全部終わったの・・・？」

「鳥とか、妖怪とか、全部」

「・・・ああ、せえくんぶ終わったぜ??」

「俺がデツケエ鳥の首とつたる?」

「・・・どうやって帰ればいいの?」

男はへへツとほくそ笑む。

またまた月夜の背筋がゾゾツ。
この男には慣れそうにない。

「誰が、化け物倒して帰れるなんて言ったんだ？」

「帰れねエんだよ、アンタも・・・そのアンタも、お前も」
「勿論、俺も翔太もな」

「え・・・」

あまりの回答に絶句。

陽夢と信三もだ。何も言葉が出てこない。

翔太は静かに立ち上がり、男の近くへと歩いて行く。

「あの、箕輪さん」

「彼女たちにも ちゃんと話した方がいいんじゃないんですか？」

「ああ〜ん？」

「……っへっへ…… お前から言っどけや」

「俺は部屋に戻ってるからよ」

男は襖をあけ、廊下へ一歩出る。

襖も閉めずに男は言ってしまった。

一歩進むたびに、ミシミシと廊下から音が聞こえてくる。

翔太が静かに襖を閉じる。

パタン　　と音がしたと同時に、信三が声をあげた。

「お、おいコレ。どないなっどんねん!？」

「突然ピカーなったとオモたら、急に変な部屋また飛ばされて」

「しかも、この写真は何や!?!」

信三の指さした先。

月夜と陽夢も気になっていた写真。

ザツと見回しただけでも百枚近くの数。

左の方は全くしらない顔だが、ズーッと眺め、一番右には忌まわしき男、上野元太の写真が白黒で。

その隣には武藤猛の顔写真が白黒で、その更に隣には新藤加羅、飛田義文。

篠原岬に、名前は分からないが、全員部屋で顔を合わせた人たちだ。

なんとなく月夜達は気付いていた。

この写真が意味することを。

「しかも、この部屋来たらワシの腹ん傷無くなってるしツ・・・ホ
ンマ」

「頭がパンクしそうやで・・・」

翔太はフーっため息をつき、豊に正座をする。

それを見習い、月夜と陽夢も正座。

信三はドカリとアグラをかく形となった。

一対三で向かい合う四人。

翔太が口火を開く。

「何から話しましょうか・・・」

「あ、僕の名前は三村翔太って言います」

「ここに来る前は大学通つてて あ、年は19です」

「好きな女優は渡辺ヒカルで グッズとかも結構持ってますね！」

「「「「「「「「「」」」」」」」」」

「・・・ゴホンッ」

「冗談はさておき、本題に入ります」

この後、月夜達は知ることになる。

自分たちに襲い掛かった不運。不条理。混沌。絶望の正体を。

キャラ紹介

18、妖しい男 「箕輪誠」 勝者 『終了の部屋』

【西編】

生存者 一覧 5名

1、霧島月夜

2、霧島陽夢

6、金田信三

16、三村翔太

18、箕輪誠

死者17名 以下略

五 【エクセレントじゃ】（後書き）

読破お疲れ様です。

意味不明な部分も多々あると思いますが、次回で詳しく『妖怪屋敷』でのルール説明をさせて頂きます。

必要ねエーよバーカ っって読者には退屈な回かもしれませんが、見て頂ければこれ幸い。ってか、バーカなんて言わないでね？ 思わないでね？ 作者泣くよ？

それでは、次回にまたお会いしましょう。

バイバーイ 感想、評価などもお待ちしております

六 【妖怪屋敷】（前書き）

先ほど、知人とカラオケに行きました。

久しぶりに大声を出したので、非常に気分が爽快！あー楽しかった！

突然ッ！ カラオケあるあるネタア〜。

- 1、上手い人が歌うと場が静まり返る。
- 2、下手な人が歌っても場が静まり返る。
- 3、曲の間奏部分で変なアドリブを入れる。
- 4、皆が次々と曲を予約するため、暗黙ルールで早い者勝ちが発生する。
- 5、団体で一人ぐらいは歌に全く関係ない事で私欲を満たしている。

ってか、僕が今日感じた事ですな。

ちなみに作者は2、3が当てはまりました。恥ずかしい。

六 【妖怪屋敷】

1、収集をかけられた人間は、力を合わせて『妖怪の親玉』を倒してください

2、その際に、不思議な力で結成された装備をするのを許可します

男性の場合は『紋付羽織袴』 女性の場合は『巫女装束』 も
ちろん、装備する、しないは自由です

3、死亡した人間は埋葬へ 生存した人間は引き続き、次の指令をお待ちください

4、ご武運をお祈り申し上げます

霧島月夜、陽夢、金田信三は絶句し、声も出ない。

三村翔太から説明を受けた後の話だ。

この話を聞いてテンションが上がるのはよっぽどのバカか、好戦的な者。もしくは精神障害者と言ったところか。

幸か不幸か、三人はいたって通常の感性の持ち主だった。気分は恐ろしく下がりっぱなし。

「じゃあ、アナタ 三村さんは」

「翔太、って呼んでください 月夜さん」

「・・・それで、なんですか？」

「その・・・ ずっとこの屋敷で、妖怪相手に戦ってきたんですか？」

「私たちの来る、ずっとずっと前から・・・？」

「・・・まあ・・・」

翔太は天井を見あげ、ウーンと唸る。

何を悩んでいるのだろうか、っと月夜は考えたが、スグに翔太は顔を戻し、話を再開。

改めて月夜は認識するが、翔太の顔は19歳とは思えないほど童顔だ。

てつきり初めて見た時は、自分と同じ年、もしくは年下だと踏んでいたのだが。

だが口には出さない。

男性って、子供扱いされるのを嫌う っって聞くしね・・・。

「実を言うと、僕がこの屋敷で戦ったのは二度目なんだよね」

「つい一週間前・・・四日ほど前に来たばかりなんだ」

「そ、そうだったんですか・・・」

「飛田さ えっと・・・ 僕の通ってた大学の先輩も一緒に連れて来られたんだ」

「最初は、そりゃあ驚いたよ。君たちみたいだね」

「逃げて逃げて・・・逃げまくった」

「それはそれは・・・」

「運が良かったのか、僕と先輩は生き残ってね」

「そんな僕たちに、屋敷でのルールを教えてくれたのが武藤さんだったんだ」

「ほら、君たちも守ってくれたでしょ？」

「あー、前髪が長い人だよ」

早く撃つでくれエエエエ！！

月夜の脳裏に、武藤猛の声が蘇った。

自分が悪かったのか？ もっと早く撃てば間に合ったのか？

いや、武藤さんも言っていたではないか。

ここでは自分の身は自分で守るのだと……。

それに私は、最大限の手助けをしたつもりだった。

「まあ、今回の【酉】では残念だったけど……いや」

「残念なんて言葉じゃ表現できないシヨックだよ……」

「あ、ごめんね 辛気臭くしちゃって」

「あ、いえいえ」

そうか、この人は衰弱してて見てなかったんだ。

武藤さんの最後まで、私のことも。

「僕の先輩……飛田義文って名前なんだけど、今回のミッションで……」

「まあ、気付いてると思うけどね」

「ああ、本当にゴメンね」

「僕だけが被害者みたいな事言って」

「ここにいる全員が平等な被害者だもんね」

目の前で笑う翔太が、凄く不憫で。

月夜の胸がズキリと傷んだ。同情してる余裕などないのに、月夜には陽夢を守る決意があるのに。

あまり、人間関係の話を広げない方がいいのかもしれない。

「ところで兄ちゃん」

「ワシからも質問ええか？」

「は、はい どうぞ」

「えっと・・・ 金田さん？ですよね」

「どうぞ」

ずっと腕組みをしていた金田が口を開く。

「さっきの男の話なんやけどな、どお〜もワシはいけすかんねや」

「あー、汚いヒゲ生やして、すかしたセリフばっか吐きよる」

「ああ、箕輪さん 箕輪誠一さんですね」

「あの人は、武藤さんから聞いた話ですと ずっと前から屋敷にいたらしいんです」

「武藤さんが屋敷に着いたのが約二週間前・・・ その時にはすでにいたって話でした」

「詳しい事は武藤さんにも分かってないみたいで・・・ スイマセン・・・」

「気味の悪い男やなあ・・・」

「あーやって団体行動を好まん人間は大体が裏もつとるやつなん」

「あ、あッ！ 声が大きいですよ」

「あの人はどことなくオカシイんです・・・ あんまり悪口は・・・
ね？」

「・・・はんッ！」

「胸糞悪いやつぢゃなあ」

月夜や陽夢にも分かっている。

誠一の人間性についてだ。アイツは、狂っていたとはいえ、人間の元太を殺した。

それも、笑いながら。

アンタは俺と同じ匂いがする

誠一が月夜へ向けたセリフ。

確かに、陽夢に手を出した元太へと刀を向けたのは確かだ。切りかかりもした。

だからなのか？ 箕輪さんに目をかけられたのは？

誠一のネットリとした視線を感じ取り、背筋が凍る。

気のせいだ。アイツは部屋に戻ると言っていた・・・。気のせいだ・・・。

「僕が初めて屋敷に来たとき、【戌】って妖怪と戦ったんだ」

「まあ、厳密には僕、逃げてただけなんですけど・・・」

「武藤さんによると、その前は【猪】」

「ここで、何が言いたいかってですね」

「十二支・・・ね？」

月夜が眩き、翔太が頷く。

「そうなんです」

「【猪】【戌】そして今回の【酉】 十二支の逆走なんですよね」

「……このまま単純計算で行けば」

「次の妖怪は【申】（さる）」

「そして、ラストの【鼠】を倒せば解放……される？」

「そうなんじゃないか、って飛田さんと話してたんです」

「まあ、証拠はないし……言うほど簡単じゃない……って知ってるんですけどね……」

「ちよ、ちよつと待ってエな」

「前に並べられた写真〃死者の数やと仮定しても、三体の化けモン倒すんに百以上の死人出すんかいな!？」

「そんなん……無理に決まっとるやる!？」

「でも! それしか僕らには希望が無いんですよ!！」

「それ以外に……何を指して戦えばいいんですか!？」

月夜は正直びつくりした。

濃厚そうな翔太が大声を人に対してあげたからだ。

自分の希望を否定されたのが、腹だったのだろうか。

ハアハアっと肩で息をする翔太。

三人に背を向けると、襖をビシッと指さす。

「説明は以上です」

「……ミッションが始まるときは、また強制収集されます」

「それまでは、屋敷内各自、自由行動で」

「・・・着替えなら、アナタ達が最初に目覚めた部屋に置いてあるハズです」

「どっからか電気も通ってるようで、本堂に風呂やトイレもあります・・・」

「庭に出れば果物が無限になってますので・・・」

「・・・それだけです・・・」

「えっと・・・本堂ってどこなの」

「今僕らがいるここですよ！」

「渡り廊下を渡った先が別館、本堂と別館の二部構成です！」

「『始まりの部屋』は別館ですので」

「・・・何よムキになって・・・」

「バカみたい・・・」

陽夢はセリフを吐き捨てえると同時に、襖へとドカドカ歩いて行ってしまった。

パンツと激しく開け放ち、廊下を進む。

こら、陽夢！つと月夜も後を追った。

残された翔太と信三だったが、屋敷ん中見学でもしよかーつと信三が退出する形で落ち着いた。

元々、神経が図太い人物なのか、信三に大きな心の変化は見られない。

いや、人に弱みを見せないタイプなのだろうか。

「・・・」

一人残された翔太。

静かに、ゆっくりと白黒の台に飾られた写真立てへと赴いた。彼の見つめる先、目の前にはある人物の写真。

言わずもがな、飛田義文と武藤猛。

彼の先輩と命の恩人。

死んでしまった。二人とも。あっさりと。

「…………ツク…………」

「ウウツ…………ツク…………ウウウ…………」

両目からは大粒の涙が溢れ出る。

無音の部屋に1人となり、孤独感の増した翔太はグズグズと泣きだした。

拭っても拭っても止まらない涙は、拭っても拭っても目から溢れ出る。

目の下を伝い、鼻を伝い、頬を伝い、畳に落ちる。

それだけの単純な作業が、彼には永遠の作業に感じた。

もう、大事な人に二度と会えない

俺達は勝つんだ！ 妖怪なんかには負けるか！ おおー！！

はい、飛田さん！ もちろん武藤さんも！

諦めなければ勝てるんですよ！

当たり前だ、こんな所で死ねるかつーの
臭いセリフ言わせんな 恥かしい……

ニドトアエナイ

「ウウ・・・アアア・・・」

「飛田さん・・・ 武藤さん・・・ウ・・・ツ・・・」

立っていられなくなった翔太。

泣き崩れ、畳の上で震えている。

フルフル、つと。涙は止まらない。

スー・・・ツと、音も無く開く襖。

「・・・翔太さん」

「・・・男のくせに、泣くんじゃないっての」

「・・・」

襖の陰から見ていた、月夜と陽夢。

広い屋敷とはいえ、ほとんど無音なのだ。

翔太が隠したつもりだった泣き声が、嫌でも聞こえてしまう。

だが、二人にはどうしようも出来ない。

大事な人を亡くした人間にかける言葉なんて思いつかない。

ましてや、大事な人を失った事がないのだ。

翔太の気持ちを分かってやれない。

「・・・行こう、陽夢」

「うん・・・」

今度こそ、本当に『始まりの部屋』へと向かう二人。
締まった巫女装束から、早く別の服へと着替えたかった。
それに、汗をかいたから。

誰か助けてエエエ 早く逃げるんだア いやアアア
アア

「……くっふふ……きっきひひ……」
本堂の東にある部屋。

布団を敷き、その上で横になる箕輪誠一は、一人にやけていた。

行燈を枕元に置き、壁にはハンガーで紋付羽織袴。

誠一自身には浴衣、温泉宿で着るような簡単な着物、もとい灰色の
浴衣に身を包んでいたのだ。

掛け布団をかけずに、敷いた布団の上でゴロゴロ

やっぱやめらんねエな…… ここは最高の楽園だ……

箕輪誠一は、【西】発生中、ずっと屋敷の中と屋上を行き来してい
た。

全く戦わなかった と言えば嘘になるが、自分へ向かってきた鳥
以外はスルー。
目の前で人が襲われようが、助けを求められようが、スルーしてき
た。

代わりに誠一が見ていたもの。

たまんねエなア人間って・・・ あんな面白いツラで叫ぶんだもんなア・・・

誠一の興味を示したのは、人々の叫び、恐怖に怯えた顔。決して人間が嫌いなワケではない。

むしろ好きだ。とてもとても好きなのだ。

だからこそ、苛めたくなる。

泣いてる顔を見たくなくなる。泣かせたくなってくる。

そして、殺したくなってくる。

自分の手で、殺したくなってくる。

でもダメだ・・・ あの子がいる前じゃあ、殺せない・・・

本当は、参加者全員を切り刻みたい欲求を持っていたのだが、誠一も大人だ。

あくまでも、恐怖した人間を殺したいのだ。

現状を把握できていない人間を殺しても何も面白くない。

だからこそ、最初は泳がせる。

泳がせて、妖怪と戦わせる。

そして、ピンチになったら助ける。

最後に、俺が全員殺す。人間を。

現にも、誠一は何十人も殺してきた。

初めて箕輪誠一という男がゲームに連行されたのは、月夜達の来る2か月前。

計六回の参加、【猪】を五回、【戌】を一回。

誠一は知っているのだ。

このゲームには『タイムリミット』が存在することを。
一時間。約一時間たつても親玉を倒せない場合、ミッションは強制終了される。

だから誠一は逃げた。

適度に殺して、適度に逃げた。

そしてタイムリミットを迎え、生還を繰り返した。

正直に言うと、猪相手にどう間違えても後れを取るハズがなかった。真正面から立ち向かえば、一人の死者も出さずに倒す自信 いや、確信すらあった。

だから誠一は逃げた。

適度に殺して、適度に逃げた。

そしてタイムリミットを迎え、生還を繰り返した。

これを繰り返せば、いつでも人間を無限に殺せる。

一人や二人殺しただけで捕まるような日常とは大違いだ。

箕輪誠一は、警察に捕まった時、てっきり永遠に牢獄で暮らすものだと思っていたのに。

とんだサービスだ。

黒服の男が、誠一には天使に見える。

だが、武藤猛。

アイツが来て状況は変わった。

いつものように、【猪】相手に傍観を決め込んでいたのに、アイツは倒してしまったのだ。

初めてミッションに挑んだ猛は、紋付羽織袴を装備しないで出陣していたのに

瓦や石を使って、勝ってしまった。

仕方ないので、猛と信三、その他生存者と初めて屋敷で暮らした。

とても苦しかった。

だって、目の前の人間を殺せないのだから。

それに、武藤猛にはどこか、期待している部分があったから。

なんやかんやで、次ミッションで翔太や義文が生き残った。

いずれ、自分の手で切り刻む楽しみが増えた。

だが、そんなオモチャが霞むほど、面白いオモチャを見つけてしまった。

霧島月夜・・・ アイツは化ける・・・ 間違いなく・・・

初めてのミッションなのに、あの凜々しい態度に戦いの腕、度胸。妹を汚され、妹のために犯そうとした殺人。

・・・楽しみだなア・・・ でもダメだ・・・ まだまだ足りない・・・
あの子が恐怖に歪む顔・・・ 崩れる瞬間が・・・

「・・・・・・・・くひっ・・・」

左から順に、シャンプー、ボディソープ、リンス、洗顔液・・・ は？

足が伸ばせるようなバスタブ、水道、シャワー・・・ はあ？
『始まりの部屋』にて、着替え 自分たちの私服かと思っただら違
った。ただの真っ白な浴衣だ をとってきた月夜と陽夢。

初めての本堂をウロウロして、やっと見つけた風呂と書かれた空間。
「女」と書かれたのれんを潜り抜け、しばらく通路を進んだ先にガ
ラス製の扉。

まあ・・・ ガラスの扉があつた時点で予感はしてたけど・・・

ガラスの扉の先には どのマンションだコレは。
めちゃくちゃ近代化の進んだシャワールームが一つ。
置いてあつた籠の中には、数えきれない量のタオル。
外観の屋敷とこの空間のギャップは何！？
まあ、入るけど

「うわぁ・・・」

「凄いよお姉ちゃん・・・ お湯が出て来たよ・・・」

当たり前なのだが、バスタブの蛇口から熱いお湯が延々に流れ続け
る。

二人は既に巫女装束を脱ぎ捨て、タオルを体に巻いた状態で風呂を
堪能。

得体のしれないシャンプーに、得体のしれないボディソープを恐る
恐る片手に出してみるが、杞憂だったようだ。

家で使ってるのとはメーカーが違うだけで、いたって普通の商品。

お湯の溜まった浴槽に、ゆっくり片足から入る陽夢。

あ、ああ……っと至福のひと時。

一番風呂をグツとこらえた月夜は、風呂用のイスに腰掛けてシャンブーを長い髪に。

洗面器でバシヤリと頭にお湯をかけると、全身が快感でブルブルと震える。

ああ……気持ちいい……

「どうなる事かと思ったけど、何だか一安心したなあ」

「案外、化け物がウンタラとか楽に終わっちゃうかもよ」

「……」

「……そうね、陽夢」

「でも、お風呂でくらい……その話はヤメにしない？」

「あ、ごめん……うん」

「……お姉ちゃん、また胸おつきくなったね」

「っへ!?!」

湯気が浴室を充満していく。

浴槽でうなだれる陽夢は、ウトウトと心地よい眠気が襲ってきたよっだ。

首をカックン　カックン　と繰り返し、目をシパシパと瞬き。

やっぱり、お風呂って良いわあ……　落ち着くわあ……

束の間の休息。

体に染みついた泥や汚れが浄化されていくのを感じた。

アホばっかやなあ、コイツらは。バカ正直に
十二支？倒さんと、もっと別の方法があるやろ。

二、三メートルはあるだろう、屋敷をグルーっと取り囲んだ壁。
その壁に、謎の威圧感を放っている屋敷の外へと出る扉。

【酉】発生時に、大人数で押ししたり引いたりしたにも関わらず、ビクともしなかつた扉。
あれを見た後で、実はまだ開くんじゃないか？と考える人間がいるのだろうか。

少なくとも、扉を見あげる金田信三はそう思わない。
この屋敷や妖怪自体が科学で説明出来ない現象なのだ。
この扉にも何らかの仕掛けがあると見て間違いないだろう。

「・・・簡単な話やろがい」

信三の身には紋付羽織袴。

お腹が出ているため、翔太や誠一とは二回りほど大きな羽織だ。
『始まりの部屋』のタンスに入っていた服に着替えてきたのだ。

翔太の話によると、この服を着ていれば通常の何十倍もの力で行動できるらしい。
つまり

この扉壊して、強行突破しかないやろ
化けモン相手に戦うのはアホのする事や　ワシはこっから逃げる

扉から十数メートル距離をとる信三。

空を見あげ、大きく深呼吸。

手足を軽くブラブラとほぐし、軽くジャンプするのも忘れない。

大丈夫、体に異常は見られん

扉を睨みつける。

とても大きな扉　とはいえ、木製だ。壊せないはずがない。

走る態勢になり、ヨーイ・・・

「ドンツ！　ああ！」

信三が地を思い切り蹴ると、背後で大量の砂埃が発生した。

足元の小石も宙を舞い、地面がえぐれる。

次の瞬間には、扉の前で体を縮める信三の姿が　巨体での体当たり。
り。

紋付羽織袴がキューーンつと音をたて、何かが起動した音が響く。

ジャリ　つと、小石と物体の擦れる音。

信三の巨体と、地面の小石が擦れる音だ。

信三は、うつ伏せになって、動かない。

体が扉と接触する瞬間、まさに直前に、信三の身に起こった事態。

身に付けていた信三の紋付袴羽織、その襟元が一瞬でキュツ
まった。 締

肺から脳への酸素を一瞬で遮断された信三は、まず、痛覚が消えた。
つと同時に、聴覚、視覚、味覚 立っていられなくなり、倒れ
る。

ダラリと口から垂れる舌を伝い、ヨダレと泡の交じった白い液体が
地面へ流れ 小石の隙間に流れ込む。

月夜と陽夢の二人は、別館の適当な部屋で眠りにつ
こうとしていた。

どうやら、『始まり部屋』『終了の部屋』以外に蛍光灯が完備され
ていない様子。

月夜の寝ている大雑把な部屋には、行燈が数個置かれているだけだ。
部屋の隅に置かれて布団一式を二つ横に並べ、疲れたので寝よう
と月夜が提案した。

陽夢にも断る理由がなく、なんとなく眠ってしまった つとの流れ
である。

障子を向いて眠る月夜に、反対の襖を向いて眠る陽夢。
姉妹同じ部屋で寝るのは何年振りだろう……

月夜は、背後の陽夢に向かって小声でねえねえと話しかける。

「……今日の一連で、お姉ちゃんの事、嫌いにならないでね？」

「・・・なんで」

陽夢の返事が返ってきた。

まだ眠っていなかったようだ。

月夜は慎重に言葉を選び、会話を続ける。

「ほら・・・今日は色々あったでしょ？」

「色々じゃ説明できないか・・・ハハ」

「お姉ちゃん、陽夢が・・・その・・・襲われてた時、助けてあげられなくて・・・」

「・・・ごめんね？」

「・・・別に」

「あんなの、一人で倒せたし・・・」

「ゴメンね、陽夢」

「でも、これだけは信じて？」

「・・・私は、いつだってアナタの味方よ」

「絶対に、死なせない・・・」

「・・・」

「・・・陽夢？」

「寝ちゃったの？」

「・・・」

返事が途絶え、行燈だけが明りをともす静寂が訪れる。

いつミッシヨンが来るか分からないので、力を込める意味で早く寝

よう　　つと月夜は判断。
おやすみ　　つと陽夢に眩いてから、掛け布団をかけ直し　　眠りに
ついた。

バカ

バカ姉え・・・

嫌いになるワケないじゃん・・・

私を襲った男に向かって、お姉ちゃんが切り掛かった時・・・

私のために怒ってくれた、お姉ちゃん・・・

自分が死ぬかもしれない状況なのに、誰よりも先に私の身を心配し
てくれた、お姉ちゃん・・・

目から溢れる涙が、陽夢の頬を伝う。

目と鼻が真っ赤に充血し、後から後から湧き出る涙。
止まらない。止められない。早く止まってよ・・・

両手でしっかりと自分の口を抑える。

少しでも、月夜に自分が泣いているのをバレないようにするためだ。ヒックヒックとシャックリを喉の奥に押し込む。

すでに枕はビショビショ。

シーツが涙を吸収していく。

本当に・・・ほんつとに嬉しかった

私の事を、あんなに大事に思ってたなんて・・・

全身がフルフル震え、一瞬でも油断すれば嗚咽が漏れてしまいそう
な。

そうなれば、月夜が自分を心配する。

心配して、困らせる。

そんな月夜を見たくない。

妹の心配をするのは姉の性だが、姉に心配かけたくないのが妹の性。

何も考えずに、月夜に甘え過ぎた事を反省、後悔、懺悔。

【酉】に襲われた時も、私は何もできなかった

ずつとずつとお姉ちゃんの後ろでオロオロしていた

そんな情けない私を、力一杯引つ張ってくれた、お姉ちゃん

布団で顔を覆い、潜り込む。

奥歯をギツと噛みしめた陽夢は、心中ある決断を下した。

今度は、私がお姉ちゃんを守る・・・絶対に・・・

陽夢の意識が途絶えたのは、これから間もなくのことだ。

月夜と陽夢の間で、信三を見かける事が無くなった。

適当な部屋で布団を敷き、眠りについた二人。
目が覚め、庭で果物を収穫し、庭をブラブラ散歩。

偶然すれ違った箕輪誠一がニタリと笑いかけてきたので、小さく会釈しておいた。

池の前でボーっとしていた翔太を見つけたので、おはようっと話しかけた。

だが、月夜達を見つけるやスグに、翔太は逃げるように場を立ち去ってしまう。

何で私たちを避けるのよ……

しかし、信三だけが見当たらない。

本堂、別館、武道場、食事処、屋敷の周り　ウロウロしてみたが、姿を見なかった。

「金田さん、いないね」

「……別にどーでも良くない？」

「多分、屋敷のどっかで寝てんだよ」

次の日も、見かける事はなかった。

月夜と陽夢が屋敷に収集されて、三日目。
大きな変化は見られない。

六 【妖怪屋敷】（後書き）

読破お疲れ様です。

サバイバルとは無縁の今話でしたが、如何でしたでしょうか？
たまには、人の死なない話があつて良いと思います。

さて、次回から更にストーリーリー進展ッ！

果してどうなることかッ！？

そもそも、ここまで読んでいる人はいるのかッ！？

では、また次回お会いしましょう。

バイバイ

七 【強制収集】（前書き）

どうも。

ついさつき、ニコニコ動画で一二時の時報を聞いた作者です。

いやー眠い。どえらく眠い。

風の噂で耳にしたんですが、どうやら【ホテル】なる場所に設置された【ベッド】は非常に眠り心地が良いそうなんですよ。

一度でいいから寝てみたいなあ、あ、変な意味じゃないですよ？

春先の小川の如く透明で清らかで純粋な気持ちで、ホテルのベッドに寝てみたいなあと言ったんです。か、勘違いしないでよねッ！出来れば友達と一緒に寝たいな。

女友達と（ry

夜のテンションって怖いですね。

それでは本編、始まり始まり！

七 【強制収集】

朝。AM8時50分。

小綺麗なビルが、周りの建物と浮くオーラを放っている。
全体的に白を主張させたビルの道路側、通行人に見えるように掲げられた大きな看板が。

花や折り紙で色づけされ、パソコンで書いた華やかな文字が中心に
デカデカと

『出張！ お笑い芸人大集合！ 詳細はビル内のチラシをお配りしております』

『出演芸人、マンジャッシュ、サンドイッチマン、東京04、ワームストロング・・・』

ビルの中、3階に男の楽屋はあった。

先輩芸人とすれ違う度にビクビクと社交辞令を交わり、楽屋へ挨拶にもうかがう。

一回り落ち着いた所で、自分の楽屋へと戻る。

そして、スタッフにスケジュールを聞き、あとはずっと待機。

その間にもネタの最終確認は怠らない。

「それじゃあ本末転倒やるが！ 何でやねん！」

「いやいや神谷はん、これでも僕はしつかりと考えて〜」

「だ・か・ら！ それが本末転倒や言うてんねん！」

「これがホントの三角テントー」

「誰が上手い事いえ言うたん！」

楽屋の机をどかし、中心で叫び続ける男。

左へ行ったり右へ行ったり　　どうやら、一人二役の漫才を練習している。

片手をビシリ　　虚空へぶついたり、ガニ股態勢で両腕を上下に振動。

一見ただけでは分らないが、彼なりに練りに練ったネタなのだ。温かい目で見守ってほしい。

「　もうええわ！　　どうもありがとうございます」

「・・・完璧や・・・」

グツとガッツポーズを決める男の名は志村健太郎。

芸名、ワームストロングだ。

いつもは大阪の小さな事務所で仕事を貰い、たびたびテレビの『新人さん紹介コーナー』にも出演していた。

今回、出張に向かうハズだった先輩芸人が別の仕事が入ったため、急遽　代役で放り込まれた新人　である。

カニのように髪の毛を左右へ大きく広げ、左半身が赤、右半身が青の服。

更にも上からは、つなぎのブカブカズボン。

容姿で笑わせる。志村健太郎のモットー、その一だ。

「あー、緊張してきた・・・」

「スタッフさん、かなり遅いねんな」

「今、何時や？」

「ってオイオイ！　　これ腕時計やオモタら、ただの手錠やんけえ！　　しかもオモチャ！」

「・・・ツプフ・・・ 一発芸にしたら、まあまあちやうど。」

一人ノリ突っ込み。彼の得意技だ。

自分の腕へビシッと突っ込み。

つと、トントン。楽屋ドアからノックが聞こえる。

はいはいと健太郎が返事をし、目の前の鏡で自分の髪型を確認。
完璧や・・・

ドアへと向かい、健太郎がドアノブを引く。

目の前には、一人の男が立っていた。

「・・・あれ？ スタッフさん」

「珍しい服 着てんねやな」

「全身真っ黒で、サン格拉斯まで・・・ それじゃあ、ただのコンナ君の犯人みたいやないかあ！」

「！フグツ・・・！」

男の拳が一発、健太郎の鳩尾に打ち込まれる。

健太郎は、男に寄りかかるように倒れ、それきり動かなくなった。

PM13時、千葉県内某所、とある神社前にて

「コラア！椿イ！」

「また勝手に出かけるのかア！？」

「たまには寺の手伝いをせんかい！！」

「あーあー聞こえない」

「コ、コラア！」

「待たんか バカ娘エ！！」

薄手の着物一枚を羽織り、神社前を掃除していた初老の男性。

つが、神社の目と鼻の先、一軒家から飛び出した我が娘を見るやスグに激怒。

ホウキを振り回し、確保するべく全力で疾走する。

来年で一七になる女子高校二年生、北条椿は、自分へ迫ってくる父親、頑固者に対して舌をアツカンベー。

チリリン　　っと、すぐに自転車で走り出してしまった。

首に巻いたマフラーが冷風の抵抗で背後へなびく。

その遙か後方では、父親がケンケン声を荒げていた。どうやら自分の名前を呼んでいるようだ。

うっさいなあ・・・

椿が小さい頃から頑固で厳しかった父。

ここだけの話、大きくなったら巫女さんになるーッと言っていたのは黒歴史。

小一の作文を兄に朗読された時は、本気で殺してやるうかと思っただのも秘密。

目覚まし時計を止めて、兄を遅刻させてやった。ざまみろ。

「・・・うウ・・・」
「っにしても、寒ウツ・・・」

一二月とあって、椿の顔にヒシヒシ伝わってくる風が非常に痛い。
耳あて付ければ良かったかも

近所の曲がり角を右折し、友達との約束場所へと急ぐ。

彼女を動かす力は、『冬のカラオケ大会』。

もうなんか、楽しもー！っとの友人発言。

おおー！っとながら即乗したのは言うまでも無い。

この日のために新曲をしつかりと頭に叩き込んできた。

巫女の仕事を放り投げ、CDを聞きまくっていた私に死角はない

「あ、危ない！」

つと、一人の老婆が叫んだ。

考えに没頭していた椿の目の前には、黒いコートに身を包んだ男。

一気に血が引き、咄嗟にブレーキをかけたがもう遅い。

キキキーっとながら高い音が鳴るも、次の瞬間には自転車の前輪が男
に接触。

ガツンッ！と固い感触が自転車を駆け抜け、椿の両手にビリッと衝
撃が伝わった。

「ススス スミマセン！」

「だ、大丈夫ですか！？」「っつっ」

男は無言で椿の喉を掴み、グググ・・・と持ち上げる。

片手で楽に持ち上げられた椿の両足が地面から浮く。

椿の脳内はパニックそのもの。足で男を蹴る事も、喉にかかっている手を振り払う事も出来ない。思考がまとまらない。みるみる意識が遠のいて行く。

「・・・あ・・・あ・・・ッ？」

椿の首がカクン。脱力した。

隣の老婆は、声を上げる事も出来ずにペタンと尻餅。

気絶した椿を電柱にソッと座らせる、つと、男の両腕は老婆へと伸びていた。

人通りのない、真昼間の道路での事である。

P M 21時 千葉県某所、某喫茶店

「浮気してゐてしょ」

「はっ」

「何だよ、急に」

「携帯見せて」

「はあ？」

「何なんだよマジで、やだよ」

「・・・やっぱり、浮気してるんだ」

「どこの女よ・・・どこのバカ女と付き合ってるのよ!!」
「教えてよ!!」

「バ、バカッ 声がデケエよ」

「他の客に迷惑かかんだろ？」

「落ち着け。落ち着けてば・・・! な？」

「・・・じゃあ、携帯見せて・・・」

「浮気してないなら見せられるでしょ・・・ ねえ・・・」

「そ、それは・・・」

「・・・その・・・」

「・・・もう・・・知らない」

「信じてたのに・・・」

「バカ!」

「あ、おい!!」

「待てよ!!」

茶色のロール髪を振り乱し、小綺麗な服にハイヒール。

肩下げバックを担ぎ、客の視線を気にせず喫茶店を飛び出した女。

カランカラン　　つと虚しく入口ベルが鳴り、後姿は光り輝く町の奥へと消えて行く。
ドアは隙間風を一瞬招き入れるも、すぐにチリリン　　つと店員によつて閉じられた。

周囲の客は一人席に残された男へチラチラ視線を送り、小さな声で何かを話している。

男は、フーつとため息。

取り出した携帯電話をポケットに突っ込む。

女同様、男の長く伸びた髪は茶色で統一されており、後ろ髪がやけに長いスタイル。

整った顔立ちに身長180?超えと、モデル体型を兼ね備えていた。街中を歩いていけば、絶対に目につくだろう容姿。

そんなイケメン男の名前は、遠山亮。今年18歳。

亮はイスに掛けておいたコートに手を伸ばし、周囲の客へ　見てるんじゃないつと視線を飛ばした。

人の痴話喧嘩見て何が楽しいんだか・・・

レジへと向かい、サイフの中からコーヒー代をピツタリ支払うと、会計を待たずに喫茶店を後にする。

カランカラン　　ありがとうございますー

彼女が消えて行った町の方と反対。

人通りの少ない路地へと、亮は向かっていた。

亮は頭を冷やすために散歩でもしようか、つと考えていたのだ。

「千夏のやつ・・・」

「あんな大声で怒るんじゃないよ・・・」

ぴたツと亮の足が止まった。

視線の先には公園。端っこでホームレスが寝ているような何の変哲もない公園だ。

丁度いいや、っと亮は公園に侵入。

ベンチに腰掛けた。

携帯を取り出し、パカリと開く。

液晶画面の光が、亮の顔を下から照らしあげた。

携帯画面の中で微笑む男女。

亮と千夏が初めて遊園地へデートに行った時の写真だ。

こんな顔をした亮だが、この時が人生初めてのデートだったとある事情により、女性との付き合いが苦手だった亮。そんな彼に接してくれた橋本千夏。

携帯を閉じ、液晶画面の光を失い、再度闇の始まる公園。

千夏との誤解を解こうにも、どこへ行ったかが分からない。何て声をかけたらいいか分からない。

はあ・・・クッソオ・・・

ベンチで頂垂れる遠山亮。

「おいおい オッサン逃げんなよオ」

「はいはいはい〜 デイフェンス〜」

「ダメでしょお？ 人にぶつかつたら謝らなくっちゃ」

「言葉だけじゃ無くて、誠意ってやつを見せないと」

「た、頼む・・・勘弁してくれ」

「さっきの金で最後なんだ、許してくれエ」

「っぎゃあ」

「はははッ！ もっちゃんナイスグーパン！」

「って、おいおい」

「おっさん泣くなってエの」

「汚ったねエツラで見んじゃねエぞハゲ！」

「おら！」

「ひ、ひい」

「うぐッ・・・」

亮の座っていた公園。

突如、自分と同じ年くらいの青年達が、一人の中年を囲むようにズカズカ入ってきた。

リンチされている中年の周りには、四人の男達。

その中の赤髪、ボス格ギャングが中年の腹へ蹴りを一発。

体を折り曲げた中年は、ゲフツとくぐもった声をあげ、地面へ倒れ込んでしまった。

その背中へ足を乗つける赤髪。

亮は危険を察知し、ベンチを立ち上がる。

すぐ背後にあった公衆便所の扉をゆっくり引き、体を滑り込ませた。嫌な匂いが鼻をツンツと突くも、気にしてはいられない。ギャングに見つかるよりもマシだ。

適当な個室に入り、先ほど閉まった携帯電話を取り出し、プッシュする番号は110番。

警察へ連絡し、中年を助けるつもりだった。

「いち、いち、……ぜろ……」

「……」

バキーン 目の前のドアが壊れた。

携帯を耳に当てた状態で固まる亮。

壁によりかかったまま、一步も動けない、声が出ない。

目の前でドアを捻り壊したのは、黒い服を着た人間。

サングラスの中から発せられた鋭い視線が、亮をその場に縫い付けた。

「あ…… ああ……」

「はい、こちら 警察署本部」

「……もしもし、もしもし」

トイレに残された携帯電話。

液晶の向こうから聞こえる女性に、応答する声はない。

応答する人間が、そのトイレにはもういないのだ。

誰もいなくなった個室で、半壊したドアが月夜に照らされた。

「あ、あの、月夜さん」「お時間よろしいでしょうか」

屋敷の縁側で一人たそがれていた月夜に話しかけたのは、視線を忙しなく泳がせる三村翔太。

二人とも浴衣だ。

翔太の背後では木に着火した灯笼があり、顔を明るく照らしていた。

この四日間、翔太が月夜に話しかけてきたのは初めての事だった。

何か変な事でも企んでるんじゃないか、ツと一瞬警戒するも、あれ？

翔太の手に握られていた箱。

月夜は警戒を解く、つと、どうしたんですか？と返答。箱をスススーと指でなぞりながら、翔太は語りだす。

「その・・・この間は、怒鳴ったりして、すみませんでした」

「お詫びと言ってはなんですが・・・あの」

「棚の中で、お菓子を見つけたので・・・」

「お1つぐらい、如何ですか？」

「・・・頂きます」

「翔太さんも一緒に食べましょ、ね？」

「は、はい」

翔太は箱の包み紙を破り捨て、月夜の隣に腰掛けた。箱を開ければ、中には八個の饅頭。一つを拾いあげ、月夜へと手渡し。包み紙を裂き、口元へ饅頭を運び

一口。

「……どうですか？」

「……美味しいですね、コレ」

「久しぶりに甘いもの食べましたよ」

「あ、本当ですか？」

「じゃあ、これ全部差し上げます！」

「どんどん食べて下さい！」

「いや、さすがにこの量は……」

別に月夜は、翔太の発言に対して腹を立たせていなかった。だが、もともと翔太は優しい性格上、謝罪せずにはいらなかったのだ。どうやって謝ろうか、丸々三日使って考えた結果、土産に落ち着いた。

「翔太さんは優しいんですね」

「わざわざお菓子、いただきちゃって」

「い、いえいえ そんな」

「元々僕の逆切れが原因なんですし」

「当然の行いですよ」

まあ、女性への謝罪へ物を持ち込むのはどうかと思うが

月夜は

気にしない。
饅頭を一口一口、ゆっくりと味わう。

「あの・・・月夜さん」

「はい？」

翔太が、やけに畏まった態度で月夜の名を呼ぶ。
全身が小刻みに震え、態度がおぼつかない。
決心したように、翔太は目を見開いた。

「・・・あの」

「どうしたんですか・・・？」

「そ、その」

「月夜さんは、お付き合いしている男性とか」

「「ッ!!」」

つと、二人の背筋にゾツと冷たい何かが流れる。
なに今の、つと困惑する月夜。

翔太は舌打ちをし、こんな時に・・・つと一言。

「急いで装備に着替えて下さい、月夜さん！」

「ミッションが始まります!!」

「え、ミッションって」

「えエ!？」

「例のアレですよ!!」

翔太は、元来た通路を全力でダッシュ。

言われるがまま、月夜も自分の装備が置いてある部屋へと走った。

同じ別館、勝手に寢床にした部屋の襖をバンツ　　と開く。

ビクツとした様子で自分を見る陽夢に、壁に掛かった白衣と朱袴を確認した。

畳で転がった陽夢が　どうしたの？という視線を飛ばしてくる。

「急いで装備に着替えて」

「ミツシヨンが始まるって　　」

「・・・まじ？」

瞬時に浴衣を脱ぎ捨て、壁の白衣へ手を伸ばす。

陽夢も巫女装束を身にまとい、イソイソと朱袴を足へ通し始めた。
本当に唐突に始まるのね

「着替えた！？　陽夢？」

「バッチしよ、お姉ちゃん」

キイイイイイイイイイイイイイイイイ

二人のいた部屋が真っ白な光で包まれ、意識が遮断された。
次の瞬間には、別の部屋。

巫女装束に身を包んだ月夜と陽夢。

その両隣には、紋付羽織袴を身にまとった翔太と箕輪誠一。

「あれ？　ここって・・・」

月夜は疑問に思った。

目覚めた場所が、『始まりの部屋』ではないのだ。

畳が敷き詰められ、背後には襖、左右には障子。

そして、目の前には四本のろうそくと、中心にミニブツ。

置いてある備品は同じだが、部屋の向きとか、広さとか、若干違う。

「我々『経験者』と、今回初めて妖怪討伐に参加する『初心者』とじゃ、始まる場所が違うんですよ」

「でも基本的なルールは変わりません」

「妖怪の親玉を倒せば僕達の勝ちです」

少し困惑気味だった月夜と陽夢へ補足説明をする翔太。
不便なのねえっと月夜が一言。

ゴーン

ミニブツから鐘の音が響き、ポンツと頭が飛んだ。

ここまでは前回までと同じ。

問題は、中に入っている紙。

書かれている文字だ。

「・・・やっぱり」

「今回の妖怪は【申】です」

翔太の拾い上げた紙には、真っ黒な単線のみで描かれた猿の姿。四つんばいになり、人間の手・・・だろうか。口に啞えている。そして、真ん中には大きな文字。【申】

『時を刻むのじゃ』

『壹拾』 『九』 『八』

「始まるかぁ・・・」

誠一がボソリ。
ニヒヒッと笑う。

『七』 『六』

「あれ、そういえば金田さんの姿が・・・」
「何で収集されないんだろっ」

「あ」

「そういえばそうですね」

『五』 『四』

「分かってるね陽夢」
「絶対に、お姉ちゃんの後から離れちゃダメだよ？」

「・・・分かってるよ」

『参』 『弐』

「・・・シ」

『壹』 『零』

『刻限じゃよ 刻限じゃよ 刻限じゃよ 刻限じゃよ』

襖、障子が開く。

四人は一斉に袖を振り、日本刀を手の中に。

翔太と月夜が目で合図を送り合い、ゆっくりと同時に足を進め

息をのむ。

部屋から廊下へ出る ツと同時に、死角である左右へバツと体を向けた。

大丈夫、猿の姿はない

「じゃあ、まずは人々の安全確保に移りましょう!」

「月夜さん、援護お願いできますか?」

「・・・任せて下さい」

「陽夢も付いてきて、ね?」

「・・・うん」

三人は、人々を救出するべく『始まりの部屋』へと急ぐ。彼らがいるのは本堂。

目的地である部屋は別館にあるのだ。

どんなに急いでも数分はかかるだろう。

その数分が、たくさんの人々の命を握っているのだ。

「あれ!? 箕輪さんは!?!」

陽夢が振り向きざまに叫んだ。

背後で、全く反対方向に歩みだした誠一を見たのだ。
翔太が答える。

「箕輪さんは個人行動が好きなんだよ」

「大丈夫、あの人なら死にませんよ」

「あ、そう・・・」

こうして、ミッション4 【申討伐】の幕が開く。

果たして、生き残るのは誰なのか。

そもそも、生き残るのか？

キャラ説明

19、お笑い芸人 「志村健太郎」生存 『始まりの部屋』

20、女子高生 「北条椿」生存 『始まりの部屋』

21、老婆 「酒井三和」生存 『始まりの部屋』

22、イケメン 「遠山亮」生存 『始まりの部屋』

23、茶髪の女 「橋本千夏」生存 『始まりの部屋』

24、赤髪ギャング 「三井門司」生存 『始まりの部屋』

残り 経験者4名、初心者12人 計16人

七 【強制収集】（後書き）

読破お疲れ様です。

新キャラをドドドツと増やしました。

名前を覚えておかないと混乱すると思います。

そう、例えるなら『絶頂を連続で迎えすぎて頭が狂っちゃった、混乱しちゃった淫乱スケベ女』の如く、混乱しますね。

はい、夜の僕は下ネタを自重しません。

あゝッ！ごめんなさいッ！殴らないで・・・ッ！ ツウ・・・

それでは、次回お会いしましょう！

バイババババイ

八 【猿山】（前書き）

『We are the world』いい曲ですよ。世界が、人々が、心が一つになる素晴らしい名曲です。

どんな人でも一度は耳にした事があるでしょう？

それに、何かしらの感想を抱いたハズです。

作曲者に拍手、感謝、絶賛、ありがとう。

つと、友人に語ってみたところ、

「あれって無駄に歌詞なげエよなw」つと一蹴。

便器に顔突っ込んでやろうかと思ったよ。

でもでも、『We are the world』『みんなは家族』です。

机の中身を全部捨ててやる程度で許しました。

その後怒られました。

解せぬな。

八 【猿山】

「あれ？ 開かねエーの」「」

「どっか他の扉はあー？」

「知らねエよバカ」

「つたく・・・もっちゃん、どする？」

「帰るにきまつてんだろ」

「どっか行くなりしようぜ」

「ここ以外にも扉あんだろ」

『始まりの部屋』から出て、すぐ近くの扉まで赴いた人々。つが、押しても引いても開かない。

こりゃダメだと判断した人々は、個人の思うままに行先を変更した。両手をポケットに突っ込み、ズンズンと歩くのは三井門司（赤髪ギヤング）。

他三人の知人と共に出口の探索を開始。

「あれ？ 見てみイ博文」

「あそこでブラブラしてんの・・・えっと、ほら、たまたまテレビに出てる・・・」

「だっれだっけなあ」

「・・・アームストロングじゃね？」

「あーあーアームストロングの奴だ！」

「ロケか？変な格好」

ギャングたちの数メートル先、別庭へ一人移動しようとしていた志村健太郎（お笑い芸人）が歩いている。後姿でも一発でわかる奇抜な格好。

周りの屋敷とは似合わない。

まあ、ジャージでウロウロしていたギャング達も、人の事は言えないのだが。

「あー 広いなあ この家」

「どうせだから探検とかしちまうかア？」

「んな事より腹減ったよ」

「ここん近くにサイゼねエのサイゼ」

「あー 俺マツクに一票」

「あそこマズイじゃん」

「やっぱ安定のサイゼだろ」

「お、お」

「見て見てあそこ」

「さっきのイケメン君と・・・彼女か？」

「・・・喧嘩してる？」

「へっへ」

「あんなケツの軽そうな女引っかけっからだよ」

「そーいや、もっちゃん彼女いんだっけ？」

「あ？」

「別に関係ねエーだろ」

右庭の縁側。

女が腰掛け、目の前で男が必死に何かを訴えているようだ。だが、女の顔は晴れない。

俯きつつ、ずっと何かをブツブツ呟く。

「だから、俺は浮気なんかしてねエーってば」

「・・・何で携帯見せてくれないの・・・？」

「それに・・・私、見ちゃったんだよ」

「亮君と、由井が一緒に買い物してる所・・・」

「そ、それは・・・」

「ほら・・・何も弁解できない・・・」

「もう放っておいてよ・・・」

「変な言い訳しないで・・・」

「・・・だから・・・」

「せめて、この屋敷から出れたら説明するから」

「ほら、一緒に行こうぜ」

「触らないで!!」

「っ!?!」

長身を折り曲げ、落ち込む橋本千夏（茶髪の女）へ手を伸ばす遠山亮。
遠山亮

だが、その手をとってはくれなかった。
パシン　　つと亮の手を払いのけた千夏は、放っておいてよ・・・
と言って顔をあげない。

彼氏に裏切られ、黒服に誘拐され、自分の居る場所も分からない千夏。

気まずげな空気が二人を包み込む。

会話のネタはないかと、周りをキョロキョロ見渡す亮。

つと、亮の視界に何かが　　チラリ

「あ、猿」

数メートル先、縁側に沿った場所で見つけた。

体は二メートル近くあり、長身の亮よりも別格に背が高い。

地面にダラリと伸びる二本の腕は　　長すぎないか？　三　四メー

トルあんぞ！？

それでも亮が、その生物を猿と判断したのは毛並と顔だ。

小じわが深く刻まれ、頬が薄く赤い。

動物園で見かける猿と全く同じ顔面をした生物の体。

全体的に茶色の薄毛で覆われていた。

そんな手長猿（仮）の周りには、二人の金髪ガングロ少女たち。

何コレー！などと興奮しながら、自分の携帯でパシャパシャとフラ

ッシュをたいていた。

被写対象となつた手長猿。

少女たちの顔を交互に、眼球だけがギロギロ　　。

気持ち悪いなア・・・

「えー 何このブサイク！」

「ウチ、初めて見たアー」

「私もー!! まじキモイ！」

「キツシーにも見せてあげよ! って、アレ?」

「圏外? ウツザア」

「マジでえ〜? ドンマア〜」

「ってか、写真なきや誰も信じてくれないレベルのキモじゃッ

」

「は?」

亮は目を見開く。

手長猿にたかっていた少女の片割れ、髪をイジっていた女の頭が吹き飛んだ。

いや、厳密には違う。

手長猿から繰り出された長い長い腕の仕業。

風を切り裂く音が一瞬ヒュンツ ムチのように繰り出されたのだ。

頭部からパシインッと軽快な音を出した少女の体が、カクン っと脱力。

脳を地面へぶちまけ、その上に全身を乗せた。

「え、は? は?」

「マジで? マジげエツ」 「エエエ?」

手長猿の腕が、もう一人の少女の胴体を横断。上半身と下半身が分かれ、中身が溢れだす。

動けなかった亮の体に意識が戻り、逃げなきゃ！っという命令が脳から全身へ。

次の瞬間には、目の前の千夏の手を握りしめていた。

「逃げるぞ！！」

「え、なにツなにツ？」

「どこに連れてく気よ！！」

「速く走れ！」

「振り返らないで走るんだ！！」

「え、振り返」

千夏の背後に伸びる何か。それは手長猿の腕。

二本の長い長い腕が千夏の肩を掴みそこね、虚空を虚しく泳いだ。

思考の追いつかない 凍りついた千夏の視線が、猿の足元に落ちて

いた少女二人の体を捕らえた。

ブツブツとした内臓だ。

目を開いて、コツチを睨みつけるように。

あれって、死んで

「いやアアアアア！！」

「バカ！見んじゃねエ！！」

右庭と突破し、中庭へと猛スピードで走る。

もつと、もつと遠くに・・・外だ！外に出れば！！

「あれ、何してんだアイツら」

「さっきのカップルじゃん、つと、何あれ」

「手長つげエなア キモ」

「猿じゃね？」

「は、猿？」

「猿ってあんなデカくねエーだろ」

キツシャアアアアアアアアアアアア

「おいおいおい、こっちに来てんぞ」

「え、ヤバくね？ やばくね？」

「おおお、おおおお」

「逃げる逃げる！ 何かヤベエって！」

メガネをかけたフード男が逃げ出し、後を続くように走り出したギヤング集団四人。

それに続くは、必死に手を引いて逃げる亮に千夏。

そして、腕を左右にブンツブンと振り回す手長猿だ。

七人 もとい、一匹と六人は中庭を疾走開始。

外への扉をスルーし、『始まりの部屋』もシカト。

目的地も見い出せないまま、手長猿と距離を置こうと必死に走った。

「走れ！走ってくれ千夏！」

「もつと早く！！」

「もつツ！何なのよオオ！！」

『始まりの部屋』内で座り込んでいる酒井三和（老婆）。その横には、パツンの前髪を弄っていた少女、北条椿（女子高生）の姿が。

世間話と興じていた二人の目の前、障子と渡り廊下を挟んだ外の子。

猛ダツシユ＋大声で通り過ぎるギャング達にカップル。

そして数秒後、手足をブルンブルン振り回す猿。

椿は思わず、自分の目を疑った。

ゴシゴシと目をこすってみる。

「え、何いまの化け物・・・？」

「酒井さん、いまの見えました？」

「・・・何だろうねえ」

「何でしょうね・・・」

「ん？」

ヒョコ っと障子の隅から顔を覗かせる猿。

三〇センチくらいだろうか、かなり小さな猿だ。

顔を半分だけ覗かせ、真ん丸な一つ目を瞬きせずに椿を見つめている。

キィーっと言。口から覗かせた小さな牙が可愛い。

椿は四つんばいで近づく。

「おおー モンキッキー」

「どこの猿だあー？ お母さんはあ？」

「キーキー」

「ほら、コッチおいで」

「べろべろー 怖くないよー」

小さな猿へ手を伸ばす。

猿は警戒しつつも、ゆっくりと手を伸ばし タッチ。

体を半分隠しているものの、右手を椿の平手と合致させた。

あ、可愛い・・・

「ほらあゝ怖くなあゝい」

「抱っこしてあげよう、か・・・え」

メキメキメキ

「え・・・痛ツ・・・痛い・・・」

「いたたたった・・・ ちよ、痛いつてば！」

「痛いッ！痛いッ！」

椿の平手と比べ、三分の一サイズの小猿の手が、メキメキ 音を立てる。

徐々に椿の手が赤くなると共に、襲い来る痛み。それは激痛へと変貌。

人差し指と中指が変な方向へ曲がり、椿の顔が歪む。

ついに我慢できなくなり、椿は大声をあげた。

「痛いつて言ってるでしょ！ コラー！」

「離さない!!」

左手で、右手から猿を引き離そうとする。だが、丸い瞳で凝視する猿の手は外れない。目に見えて右手が陥没していった。

痛い、痛い!!

「いい加減にしてよ!!」

つと、椿の右手は猿本体へ。

体を半分だけ出していた猿の顔へと伸び、喉を掴む。

指で猿の喉仏を刺激し、手を離すよう強行手段に出た。

キキキーっ と苦しそうな声を出す小猿。

「このツ・・・ ああ!!」

「痛ったあゝい・・・」

手を離し、庭の奥へ走りだす小猿。

尻尾をフリフリと振り、小さな林へと姿を消してしまった。

満足に動かない右手を抑え、涙目になる椿。

猿ってこんなに凶暴だっけ・・・?

「おやおや、椿ちゃん」

「大丈夫かい？」

「ちょっと・・・無理みたい・・・っす」

「何か・・・こう、包帯とか」

「部屋にありませんかね？」

「ああ、ええ、ええ」

「ちょっと待っててね 探してみるから」

『始まりの部屋』を後にし、襖を開けて出ていく三和。腰の曲がった老婆のため、足取りは非常に悪く、戻ってくるのに時間がかかりそうだ。

その間にも、ズキズキと痛みが増す右手。

中指の筋がおかしい。折れたのか？ 最悪・・・

「ああ・・・もう・・・」

「何なのよお・・・ じごくじお・・・」

キィーキィーキィーキィー

「・・・え、うそ」

「何あれ、え」

小猿が入って行った林。

甲高い声が聞こえたかと思うと、スグに猿が飛び出してきた。

一匹ではない。片手で数えられない。両手でも。

十を超える小猿が飛び出したのだ。

しかも真っ直ぐと、直進的に樁へと向かってくる。

ヤバいッ・・・！

「きゃあああ！」

「何なのよお！！！」

三和の出た襖へ飛び込み、廊下へ転がり出た。

初めて見た屋敷の内部に戸惑いつつも、必死に、適当に走りだす。転んだ拍子に右手へ激痛が走ったが、構ってられない。

角を右へ、左へ、また右へ。
代わり映えしない屋敷の中をドタドタドタ。

「ひ、ひイ・・・」

「誰かあ！ 誰か助けてええ！！」

「ツ！？」

「誰かいるのかアー！！」

「返事しろおお！！」

男の人の声。

椿は足を止め、声のした方へ叫ぶ。

「ここです！」

「誰かッ！ 誰か助けて下さアアアアい！！」

キキキキキー！！

「ひイ！」

小猿が追ってきた。

背後を振り返れば、廊下の端から迫ってくる二匹の小猿の姿。

一度止めた足が動かない。ガクガクと震えて、動けない。

「下がってて！」

つと、震える椿を押し退けて、小猿へと走って行くのは一人の男。
真っ黒な紋付羽織袴を着こなし、栗色の髪がなびく。

右手に握られた日本刀を振り上げ

刀！？ え、ええ！？

「はああ!!」

三村翔太の振り下ろした日本刀が小猿の体へ。

っが、キキキっつと声をあげた小猿は咄嗟に右へジャンプ。

壁に一瞬張り付いたかと思うと、次の瞬間には翔太の顔へと飛び移っていた。

小猿の小さなお腹が翔太の顔へと乗っかり、短い手足をガツチリ絡ませる。

「ああ!危ない!!」

「ぬう・・・わああああああ!!」

翔太が叫びながら小猿の後頭部を掴んだ。

バキィ　　つと音が小猿から聞こえ、手足がダラリ。力が抜ける。

動かなくなった猿を壁へと叩き付け、翔太は二匹目の猿へ　　つと、大変だ。

翔太の足を潜り抜けた小猿は、尻餅をついていた樁の元へ。
え、ええ、えええ!?

「早く下がって!」

飛び掛かった猿の眉間へ刀が刺さる。

樁の背後から現れた黒髪少女　　同い年だろうか?　　が突き立てた刃だった。

右目から顔へ深く刺さり、貫通した日本刀。

刃先を床へ向けると、ズルリ・・・ゆっくりと猿が抜け落ちた。

「大丈夫でしたか!？」

「あ、大変! 右手にケガを!!」

「いやいやいや! そんな大げさな!」

「それよりも、さっきの男の人の顔に猿が」

「大丈夫でしたか! 月夜さん!」

「そのアナタも」

「あれ!?! ピンピンしてる!?!」

翔太の無傷な顔を見て、心底驚く椿。

どうして!?! 猿に顔を掴まれたのに!?!

「詳しい説明は後です」

「今すぐに着替えて下さい 今すぐにです!」

「は、はあ!?!」

「なによ急に つて、ちょっと!」

「腕引つ張らないでよ!」

翔太に腕を引つ張られ、『始まりの部屋』へと急ぐ。

まだまだ【申】は始まったばかりだ。

はやく、他の人たちを探さないと

本堂の部屋。畳と障子しかない殺風景な部屋

だ。

その中心で立っているのは一人の男。

片腕を紋付羽織の胸元へ突っ込み、片腕を自分の腰に差した刀へ。

薄ら笑いを浮かべた狂気の男、箕輪誠一だ。

「・・・・・・・・ツ」

そんな誠一の目の前。

一人の人物。いや、人間じゃない。

同じ部屋で立ちすくむ。

「・・・・・・・・ツ」

片腕を薄手布の胸元へ突っ込み、片腕を自分の腰に差した刀へ。

汚れた薄手の着物に、細い帯を巻いただけの簡単な服装。

頭は坊主だが、服から出ている手首や足首には茶色の剛毛。

そして、極めつけは顔。

額と目じりには深いシワ。

頬が薄く赤く、吊り上った唇の隙間から見える八重歯。

ニツタリと薄く笑っている。

「……ハア」

誠一が大きいため息をついた。

「世の中じゃ、自分に似ている人間が三人はいるって言うがね？」

「まさか……エテ公何かと顔が似てるだなんてね……」

「……ッ」

「……ツチ」

「俺が猿顔だつてえーのかい？」

一歩、一歩近づく。

つと、瞬時に刀を抜いた。

刃は弧を描き、的確に猿の首元へと向かい　　カァン！つと音が響く。

猿の抜いた刀が、誠一の初太刀を弾いだのだ。

誠一は目をパチクリ。

コイツ……

「誰がサル顔だつてエ〜のかい？」

「人間風情が猿を語るな……」

「っ！　コイツは驚エた……」

「人間の言葉が分かんのかい……」

「……しかも、喋り方までソックリときやがる」

誠一は、刀へ込めた力を緩めた。
ゆっくりと、猿の首元から刀を外し、ニッコリと微笑む。
猿が眉間にしわを寄せ、キィシャー．．．と威嚇。つと、誠一の瞳
孔が開いた。

素手の左手がサルの顎へ打ち込まれ、モロに食らった猿が後方へヨ
ロヨロと後退。

がら空きの腹部へ伸びる誠一の刀　踏み込んだ畳が唸る。
ヒツヒツ！つと笑い声が漏れ、勝負は決まったかに見えた。

だが、猿は咄嗟に手持ちの刀を自身の前方へ。
再度、お互いの刃が接触する形に。

「．．．ほオ．．．」

「．．．ツ」

「ムカツクねエ．．．」

「俺が、猿と一緒にだなんて．．．」

「．．．．．キツシヤア．．．」

「っひひひ　来いよ猿」

「まずは．．腕だ」

カアン

キャラ説明

25、金髪ガングロ少女A 「峰孝子」死亡 『別館・右庭』

26、金髪ガングロ少女B 「小島みさ」死亡 『別館・右庭』

27、パーカー眼鏡ギャング 「重道和也」生存 『別館・中庭』

28、ギャングA 「渡辺博文」生存 『別館・中庭』

29、ギャングB 「和久井勇太」生存 『別館・中庭』

残り 経験者4名、初心者10名(12名)、計14名

【手長猿】 身長と腕の比率がおかしい猿。

その長い両腕をムチの如く敵へと打ち込み、破壊する。非常に好戦的。

【小猿】 見た目と裏腹に非常に大きな腕力を秘めた猿。

一個体ならともかく、普段は群れで行動しているために厄介。

【ミザル】 成人男性と変わらない容姿の猿。

常備している刀で戦う所からも、人間味を出している。

その腕は凄まじく 箕輪誠一と互角の攻防を繰り広げるほど。

ちなみに顔も行動も箕輪誠一とソックリだが、関係性は皆無だと思われる。

八 【猿山】（後書き）

読破お疲れ様です。

猿と人間の戦い！

執筆してる途中、かの名作映画『猿の惑星』を思い出しちゃった。でも、今作品にはあーゆう猿は一匹も登場しません。

大体全部エグエグしいです。キモさを意識しています。

『大体全部』って『全部、10割』なんでしょうか？

それとも『大体、7、8割』？

間をとって『9割』？ なんだか無性に気になります。

それでは、次回またお会いしましょう！

バイバイ！！

九 【我こそは最凶の男】（前書き）

一度投稿をミスって、ここに書いた文章が消えてしまいました。

マリオについて長々と書いたんですが、今じゃ一文字の痕跡も無い。
はぁ・・・

もう一度書く元気がありません・・・

さて、本編始まり始まり・・・

おそらく次回にマリオネタで前書きします・・・

九 【我こそは最凶の男】

「　　っしっしやア！」

箕輪誠一の刀がミザルの頬をかすった。
血しぶきが舞い畳を濡らす　　間もなく、ミザルの反撃。

正確に突いた誠一の眉間。
つが、超反応により顔を右へズラす。
咄嗟に手持ちの刀を誠一が避けた右方向へ、またまた正確に右顔を
ヒュンツ　　虚空を泳いだ。

「　　ひひっ・・・」

しゃがんだ誠一が笑う。
ミザルの顎下、死角から伸びる誠一の刀。
喉へ一直線に向かった刀は　　惜しい。首元の毛を数本剃り取った
だけだ。

受けへと回ったミザルは後方へ一回転。
バック転の要領で距離をとる　　事なんてさせない。
瞬時に接近した誠一の体。
風を切る音と共に、ミザルの視界一杯に広がる刀先。

ほぼ反射的に体を捻らせたミザルだったが、畳に舞ったのは黒い鮮
血。

つと共にボトン　　刀を握った腕が落下した。

キシヤアアつとミザルが一言。

咄嗟に落ちた左手から刀を奪い取り、体を転がす。

襖を破壊し、部屋から脱出したのだ。

ゴロゴロ転がるミザルは、隣の部屋で素早く起き上がる。

無くなった左腕をチラ見し、誠一へ向かってキシヤア・・・威嚇。

「言つたるおゝ?」

「次は足だ」

ゆっくりゆっくりミザルへ近づく誠一。

唇は吊り上り、心底楽しそうだ。

次の瞬間には畳を蹴り、ミザルへ接近開始。

「ギツシヤア`ア`アアアア!!」

ミザルが大声を上げ、右手で刀を振り上げる。

ビシュン　つと、重い音と同時に振り下ろされた刀。

誠一の顔ストレスを通過。

つが、誠一の握っていた刀を叩く事に成功した。

構えていた刀が振れそうにない誠一。

「アアア!!」

なので誠一は拳を腹へ打ち込んだ。

意識外からの一撃に体を折り曲げたミザル。

その顔の前には丁度いい、誠一の膝が　ガツシンツ、蹴りあげられた。

強制的に天井を向かされたミザルの両足は無防備。さっそく右足のけんを切断する誠一。

ザパツ　つと音が発せられ、ミザルの体が畳の上へ落下する。

小さく痙攣さえながら誠一を見あげるミザルの目は、鋭く吊り上っていた。

悔しそうにキシヤア・・・キシヤア・・・つと唸る。

「腕一本に足二本じゃ足りねエよなアゝ猿」

「どうせだから　もう一本の腕を　おっと」

ミザルは誠一の顔へと刀を投げつけ、逃走を開始。

切られた足と腕を駆使しながら、別部屋へと姿を消していった。つが、傷口から溢れている血がビチャビチャ・・・。

その行く先を暗黙に示す。

「・・・ツチ・・・」

「メンドクセえエな」

ガツタン

「あゝ？」

隣の障子が誠一へ倒れてきた。

そこから現れた猿。

誠一よりも四回りほどデカい、巨体。

林と小池を背景にした廊下で立ちすくんでいる。

両目は真っ赤に充血し、その周りは黒い毛でグルリと一回転。
グルルル・・・っと大きな口から音が漏れ、牙とよだれが垣間見れ
た。
全身毛むくじやらでゴツゴツとした肉体。
例えるなら猿じゃない。大きなゴリラか。

「なに見てんだ猿・・・眼鏡かソレ」

「まさか、僕は眼鏡ザルです　とか言う気かア？」

「ゴルッアッアッアッアッアッアッ！！！！」

「・・・っせエな・・・」

「ギシヤッッアッアッジャッ」

誠一の刀が瞬時に眼鏡猿の両ひざへ、同時に切断。
軸を失い、目の前に落ちてきた胴体をスッパリ　切断。
細かな内臓を始めとし、廊下に散らばるのは米俵サイズの臓器だっ
た。

足、下半身、上半身と三分割にされた眼鏡猿はピクリともしない。
舌をダラリと垂らし、白目を誠一へ向けている。

「あーあー、キモ」

「うるっせーっつんだろがサル」

「俺アお前に用がねエんだよ」

誠一は足元に溜まる血を目で追い　アツチか・・・
部屋を後にした。

左庭の様子

「ヒッ、ヒッ　　ッ！」

眼鏡ギヤングを先頭に、庭を疾走する若者達。

いくつかの扉を見つけたのだが、背後スグに迫って来る手長猿のせいで開ける時間がない。

「あアッ！あッア！」

「どこまでエ　　えエ、追ってくだよオ！！！」

つと、目の前でゆっくり歩く男の姿。

頭はスキンヘッド、かなりの長身に肩幅が広い。

服は　　灰色の作業服だ。

確か・・・部屋（始まりの部屋）で座ってた男ッ！

「おいアンタッ！逃げろ！」

三井門司が走りつつ叫ぶ。

男は振り返り、一瞬目を大きく開いた。手長猿の姿を捕えたのだろ
う。

そのまま動かない。いや、動けないのか？
ほぼ無表情で手長猿を凝視していた。

「きゃあアア！」

つと、徐々に失速していた橋本千夏の声。
手長猿の伸ばした二本の長い腕に捕まったのだ。もはや、触手に近いその手。

千夏の首、腹へと巻きつく。

必死に千夏の手を引いていた遠山亮。

咄嗟の事に判断が効かず、えッ！？と声をあげたまま、何も出来ない。

長い腕を振り払おうともせず、声を荒げながら千夏の腕を力強く引っ張る事しか。

つが、固く縛られた腕は取れそうにもない。

千夏が苦痛の声をあげた。

「嫌ア！い、いやア！！！」

「アッ　ア　ア・・・」

首と腹を締められ、声の出ない千夏。

視線は宙を泳ぎ、足はちゃんと地面を踏めない。

体が倒れかけ、ズズズ・・・と体が後退。

口が耳まで裂ける手長猿の元へゆっくり、ゆっくり

「千夏ウウ

アア　ア　ア　！！！」

「でイヤあああ！！！」

つと、瓦屋根から落ちてきた刀。いや、刀を握った人間。

千夏に巻きついた両腕へと振りおろし、切断した。

又ルツ・・・つとした液が飛び散り、地面へと腕が落下。意識を失った千夏の体を、亮が咄嗟に抱きかかえる。

「全員離れないでッ！」

「私の近くに、近くに集まってッ！！！」

亮の目の前で喝を飛ばした少女。

かなり小柄で、二つに結んだ髪が闇で揺れる。異様なのは服装だ。

神社でよく見るような 俗に言う巫女装束を着ていたのだ。

巫女装束に日本刀で武装した少女、霧島陽夢。

腕を失い、吠え続ける手長猿へ接近していった。

短くなった腕、つとと言ってもまだ一メートルはある腕を陽夢へと伸ばす。

左からの腕を刀で、右からの腕を屈んで避けた陽夢の体は、すでに手長猿の目前へ。

無防備な手長猿の腹へブスッ 深く深く日本刀が突き付けられた。

刀を伝って手長猿の血が流れてくる。

「スゲエ・・・スゲエ・・・」

「何だ、あの女・・・」

「中学生じゃねーの??」

「え、あの猿よえーじゃん」

門司とギャングが口々に呟く。

つと、目の前では更に悲惨な出来事が。

猿の腹に刺さった刀をグリグリ・・・ズバツ　つと、脇腹を通過し、外へ。

体を支えきれない猿は、地面へと上半身を打ちつけた。

下半身も、後を追うようにゆっくりと　ドサリ。

・・・やった・・・

「ほらッ！　早く集まって！」

「離れると危険　」

「ぎゃああア!?!」

「なんじゃごりゃああア!!」

オールバックギャングの腕が天高く飛び上がり　血しぶき。

屋敷の中から飛び出してきた二体目の手長猿、長い腕がムチの如く振るわれたのだ。

肩を叩かれ、腕を失ったギャングは地面でゴロゴロ転がる。

つと、周りの若者たちも一目散に走りだした。

「勇太　あッ！」

「離せええ工！」

倒れたギャングへ近づいた門司が腕に捕まった。

胸を抑えられ、その場から動けない。

手長猿は、残った片手を振り上げ　ビシュンっと一撃。

猿の腕は門司の頭を通過。
首を曲げた門司の頭上をミリ単位で通過していった。
赤髪が何本か散る。

「うわゝアアアゝ!!」

「みんツ、みんなツ!!」

「全身コツチに来て!!」

弓矢を構えた（袖から取り出した）陽夢が叫ぶ。
その声に集まるのは、門司以外の人々。
陽夢の背中へと回り込む。

当たれ・・・ツ!

矢先は、門司を捕らえた手長猿の頭。真っ直ぐに飛んで行った。
頭を矢が抉ると共に、飛び散った中身。
つが、手長猿は倒れない。

門司をズルリ・・・と腕から離し、ギャアゝアゝアゝと大声。

ズシンズシンつと陽夢に向かって走ってきた。
かなり速い。腕を左右に大きく振っている。

落ち着いて・・・頭を狙って

「きゃあッ!!」

間に合わなかった。

地面に散らばる弓矢一式。

腕に薙ぎ払われた陽夢の体が宙へ浮かぶ。

大木に叩き付けられ、後頭部に痛みが走った。

つと、一瞬朦朧とする意識。装備がなければ死んでいたのだろうか。

「アア、ぎゃあア、ア、!?」

手長猿が次の標的に選んだのは、陽夢の背後で戦況を見守っていたデブギャング。

突き出された腕が男の腹を貫いたようだ。

口からコポコポ血が溢れる。

尻餅をつく眼鏡ギャングに、来た道を引き返す亮。失神した千夏を抱いたままで、だ。

「おお、お、おお!?」 「がパツア!?」

次の瞬間、デブギャングの腹から現れたのは、数本の細いもの。腹に突っ込んだ猿の腕が分裂し、内側から引き裂いたのだろう。

ドパツ つと音が鳴り、腕が引き抜かれる。

ああ・・・ ああ・・・

悔しい・・・ 私じゃ、人を救えないの・・・?

ずっとずっと、お姉ちゃんの後ろで震えてなきやダメなの・・・?

自ら、一人で行かせてくれ つと、翔太と月夜に申し出た。

散々反対されたが、反場逃げるように二人の元を離れたのだ。

きつと、お姉ちゃんがいると、甘えちゃうから・・・

「ひいやあ、あ、ア!!!」

足の動かない眼鏡ギャングが声を荒げた。
つと、猿の腕がグパア・・・粘液と共に中心から広がる。
まるで、口のような。ワームのような。

泣きだした男の頭をパツクリ、丸のみ。
グツチュグツチュと音をだし、上半身を飲み込んでいく。
すでに腰まで吸い込まれている。
座っている暇ではない。

「あああ、ア、あああ!!!」

接近し、陽夢のふるった刀は猿の腕へ。

男を捕食していた猿の腕をバツサリ、つと切り落とした。
霧のように薄く、納豆のように糸をひいた液が陽夢の顔へ。
拭っている場合かッ!

「はアアア!」

手長猿の頭へ、重い重い一撃を叩き込む。

右脳をえぐり取られ、ポトポト 部品がバラケル。異臭を放つ。

眼球が陽夢の足元へ転がった時、完全に猿は事切れた。
足元に崩れ落ちたまま、ピクリともしない。

「大丈夫ですかッ!？」

「つつっ」

急いで、ワーム（手長猿の腕）を開いたが、遅かった。

ついさつきまで、足をバタバタしていた男だったが、ワームを開いてみれば 上半身がない。

ドロオリとした粘膜に、熱風、異臭 っう・・・

「 っう・・・」

吐きそう・・・

「博文イツ！！ 和也アツ！！」

オールバック男の横で座っていた門司が駆け寄る。

そして、変わり果てた旧友の前で膝をつき 動かない。

ただ地面を凝視し、動かない。

陽夢が声をかける。

「・・・仕方ないけど、どうしようも・・・ない・・・ですよ・・・」

「早く、他の猿が来ないウチに っ」

「何が仕方ねエんだよ!?!」

門司が叫ぶ。

「目の前で親友殺されて 仕方がない、はいお終いか!?!」

「っざっけんな!」

「博文も和也も・・・ そんな軽くねエんだよ!?!」

「な、何よその言い方・・・ッ!」

「私が悪いとでも言いたいのか!?!」

「違エけど・・・ 違っけど・・・ッ!」

「・・・こんなものって・・・」
「バカげてんだろオ・・・がよッ!!」

何よコイツ・・・不良のクセに、熱くなつて・・・

「・・・そうね」

「分かったから、場所を移動しましょう?」

「説明は省くけど、アナタは今、とっても危険な事に」

「・・・お、おいガキ」

「あれも、仲間なんか?」

「え?」

門司の指さす先。陽夢の背後だ。

振り返れば、オールバック男の眼前で、立っている男の姿。

身長が二メートルほど、袖がボロボロの布を羽織り、肩幅が異常に広い。ガタイが良い。

頭はモヒカンのように中央からモツサリとした茶色毛が生えそろうい、モミアゲが長い。そんな大男。

腕や足からは濃い茶色毛が浮き上がり、まるで、そう・・・猿みたいな

「ア、ア・・・」

オールバック男の顔面を掴み、持ち上げる。

空中でメリメリメリ・・・ツと嫌な音が。陽夢と門司の背筋がゾク
リ 嫌な予感。

次の瞬間に、予感は的中した。

リングを潰すような、そんな軽い感じ。

一瞬で砕け、飛び散る頭蓋に脳。

ドサリ　　っと体が地面に落ち、沈黙の間が流れる。

「……………あ…ツ！」

「な…あ…？？」

大猿が首をゆっくり　陽夢と門司に向けた。

眉間にシワが寄っており、唇がキュッと締まっている。

つが、目が死んでる。

白目の無い、黒目しかない、真っ黒な、洞窟のような、空虚な眼球。
ジツ　　っとみてる。

「……………二…ン…」

「……………あ？…？」

「ニン…ゲ…ン…？」

人間…？

「ひイツー！」

大猿が地面を蹴り、背後に小石がゴツソリと飛ぶ。思わず悲鳴を漏らした陽夢。

とても長い足がズシン、ズシン　　っと音を立てて近づいてきた。

静かに右腕を前に伸ばし、空気をグツとつかむ。

そして開き、グツと掴む、の繰り返し。

「　　ッおい！！」

「アイツは敵なんかッ！？」

「敵なんだなッ！？」

門司が叫ぶが、陽夢の耳には入ってない。

自分の無力さを思い知ったのだ。

装備をし、状況を把握した上で臨んだミッション。

なのに、人を助けられなかった。

深い悲しみに、絶望。

「ニンゲ・・・ン・・・」

「イッパ・・・　　イ、イ、ッ！！」

つと、大猿の頭に突き刺さった一本の矢。

進軍は止まらないものの、大猿の意識は矢を放った張本人へ。

咄嗟に、陽夢と門司が振り向く。

そこに立っていたのは、弓矢を構えた一人の男。

初心者の中に紛れていた、作業服を着たスキンヘッドの男だった。

顔の堀が非常に深く、眉が太い。

凛々しい顔つきで構えた弓矢は、先ほど陽夢が落としたモノだ。

陽夢の落とした矢、計五本。

二本目を構えた男。

真っ直ぐと、大猿の額へ標準を合わせていた。

「・・・ッ」

「あゝあゝ？」

ミザルの血痕を辿っていた箕輪誠一。

屋敷の襖をあけ、次の襖を開け、廊下に出て、襖を開け 辿り着いた。

部屋の真ん中で座り込む、息も絶え絶えなミザル。

ギリギリ開いているであろう両目が、辛そうに閉じたり開いたり・・。

つと、次の瞬間だった。誠一の肩に短剣が突き付けられたのは。

「あアん？」

つが、紋付羽織の効果によって、誠一本体は無傷だ。

短剣から手を離し、誠一と距離をとったのは、一匹の猿。畳で転がるミザルの横で、懐から再度、短剣を取り出す。

女形なのか、体を覆った布は胸部が膨れ上がり、へソを出したスタイル。

へソが丸見え＋大きなクビレからも女体を連想出来た。

ただ、はみ出た体や手足は薄い茶色毛で覆われ、尻尾が尻から一本。長い茶色毛が頭から生え、鋭い目を誠一へ向けて睨んでいた。

「・・・旦那守る嫁さん・・・ってどこか」

女猿が誠一へ接近。短剣を真っ直ぐ誠一の喉へ。
ヒュン　　っと空振り、だが即座に二撃、三撃。
小回りの利く短剣が次々に誠一の急所へ打ち込まれる。
体を密着され、日本刀を活用できない。

っと、誠一の腹に短剣が当たった。

そこに意識を向けてしまった誠一の腕に、もう一撃。

さらに、おまけの蹴り。

背後の襖へ派手に吹っ飛ばされる。

「この野郎オ・・・」

ホコリの舞う部屋で、誠一が立ち上がった。

怒りのあまり、こめかみがピクピク。

起き上がるごと、日本刀を杖の代役として使う。

「　　ッ？」

日本刀が無い。

さらに、右手首がない。

畳に散らばる鮮血。真っ赤な、鮮血。

「形勢逆転、人間」

「次は、足だ」

「あッ!?」

いつのまに回り込んだのか、誠一の背後にはミザル。

片足で立ち、尻尾で握った刀をビシユン　振り抜いた。

咄嗟に横へ転がった誠一は、態勢をたてなおし、羽織の中から刀を

「遅いよッ」

刀を取り出そうとした腕。そこに伸びる短剣。

二度目の転がりで襖へ突っ込む。

しつこく追い打ちをかける女猿。

「キツシャアッ!」

「んぬあッ!」

短剣を叩き込む女猿。

誠一は畳で、仰向けになったままだ。

次々に叩き込まれる女猿の短剣を、誠一は草鞋の裏で蹴りまくる。

腹、腕、頭、また腹、がら空きの心臓。

それらを全て、完全に、二本の脚で蹴り返した。

「シャアッ!」

「・・・ッ!」

ついに、脚が短剣に勝る。

天井へと短剣が突き刺さり、次の瞬間 女猿の腹へ打ち込まれる蹴り。

背後へ派手に吹っ飛ぶ。

そのスキに誠一は二足歩行へ移行。

「・・・ツシヤア・・・」

「・・・っへへ」

フツツとため息。

尻尾の刀を、懐の短剣を構え直す二匹の猿 交互に顔を睨みつけ、
フウフ、二度目のため息。

「・・・飽きた」

「もう、終わりにすんぞ猿ども」

「・・・ツ！」

身構えるミザルと女猿。

誠一はゆっくりと、羽織の中から日本刀を取り出した。

「・・・ツハア・・・」

心底、つまらなそうに。

キャラ説明

30、作業衣の男 「本郷淳一郎」生存 『別館、左庭』

妖怪図鑑

【めがね猿】 持ち前の腕力と牙で獲物を破壊する猿。エサを必要としないため、人間を襲う理由は、ただの殺戮だ。

【イワザル】 成人男性と変わらない容姿の猿。ただ、身長は非常に高く、筋肉がビッシリ。尻尾あり。

人間の言語も、それなりに理解できる様子。未知数の腕力、握力、脚力を兼ね備え、人間の頭も楽に潰せるほどだ。

【キカザル】 成人女性と変わらない容姿の猿。周囲の猿以上に俊敏で、懐に仕舞いこんだ短剣を振う戦闘スタイル。

人間の言語は理解できる。

ちなみに、【ミザル】の嫁ではない。

九 【我こそは最凶の男】（後書き）

読破お疲れ様です。

今回、次回とあまりストーリーが進展しません。
ゴメンなさい。

では、また次回に！
バイバイ！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1169z/>

妖怪屋敷

2011年12月13日01時53分発行